洞爺湖サミット　国際交流インフォセンター／キャンプ（札幌・当別）報告集

オルタナティヴ・ヴィレッジ

私たちの小さな村のこころみ

ALTERNATIVE VILLAGE

天神山キャンプに参加して

松本 哉（素人の乱）

6月末、東京をウロついてる連中がG8がらみで続々と北海道に向かい始めた。最初は気にしてなかったんだが、だんだん高円寺から人が減ってきて心細くなってきたので、思わず後を追って北海道入りしたのが7月3日。最初はG8には行くつもりはなかったので、不覚にも前情報は一切なかった。まあ唯一の情報が、天神山のメディアセンターがキャンプだという情報だった。空港でたまたま雨宮処凛を発見したので（あの服装だから異常に目立っていてよかった）、行き方を聞き、天神山に向かった。すると！　なんだか映像流したりしてて、誰もキャンプなんかしてない。俺だけ寝袋、銀マット、テントなどフル装備だ！　しまった、だまされた!!　誰だ、天神山キャンプだって言ったのは!?　メディアセンターって、どうも名前がおかしいと思った！　ともかく、その日は何とか一晩をすごした。

さて、よくよく聞いてみると本物のキャンプは当別というところにあるとのこと。早速、翌日、向かってみると…。おお、すごい！　原っぱにテントがポツポツとあるいいところだ！　いやー、北海道にキャンプなんかしに来るのは何年ぶりか！　これは楽しいぞ!!

ただ、一応、巷ではG8なるものが行われていた。金持ち連中のボスたちが集まるっていうロクでもない一大イベントだ。ってことで、北海道各地でG8反対イベントがたくさん企画されており、その出撃基地という側面もあった。しかし、それ以前にキャンプってのがよかった。そこには日本中や海外からから来た奴らが、昼寝したり、焚き火したり、音楽聴いてたりと、のんきにやっていたのだ！

いま、東京・高円寺の北中通り商店街では、素人の乱始めわけのわからない連中がウロウロしていて、大変なことになっている。こういう、G8連中の最も求めていないような奴らがウロウロしてる社会があって、しかもそれが成り立っちゃってるというのはかなり面白い。平日の昼間から普通に公園で昼寝してるわ、部屋にモノが何もなかったり、することないので朝から晩まで高円寺中を歩き回ってたり…。北中通りなんかもはや存在自体が反G8といっても過言ではない（あれ、言いすぎかな？）！

そう、キャンプも同じで、勝手にのびのびと住み着いちゃってるんだから最強だ。こうなったら、G8が行われるかぎり、その場所を常にわけのわからないキャンプ地と化し、とてつもない役立たずがウロウロし始めるしかない！　G8が通るたびにマヌケ都市が増える！　これはすごい！

うらやましいぞ！　おい、G8！　北中通りにも来てくれ!!　高円寺北集会所なら押えておくこともやぶさかではない！

本人・作

気がつけば、そこに僕がいた

森山軍治郎

サッカーをしていた。旧中小屋中学校のグランドだ。フランスのマッシュー、マレーシアの若者それに教え子のスガワラらがいる。ぼくも無心にボールを追って走る。六七歳だけど走る。ピッチはバスケ・コートの広さもない。だから走れる。草ぼうぼうになって、使える面積が限られたのだ。それでも「反G8ワールド・カップ」だ。ぼくはグンジーだ。

途中で、ぼくがよばれた。当別町の役場の人たちがキャンプ場にきたのだ。そういえば、ぼくはこのキャンプの共同代表のひとりだった。札幌市との交渉が決裂してからは、代表などどうでもよくなっていた。交渉のために必要だった代表だったからだ。が、こういうときには代表に戻る。意識も戻る。

共同代表依頼の電話をうけたときも、よく理解できないままにOKした。市との交渉などの過程で、少しずつこのキャンプのイメージができてきた。思えば、とんだ代表だった。はじめは名ばかりの代表だろうと、勝手にきめていた。そもそも、代表者会議開催はおろか、実行委員会設立会議の二週間以上も前に、ぼくは代表として札幌市に要望書を提出していた。そのシーンがテレビのニュースで流れた。それでいい気になって、やりはじめると、ひとりでに体重がのりだしたのだ。

やる気になっても、キャンプには参加する気はなかった。前期高齢者だし、あとは若者にまかせる。と思っていたけど、なぜかぼくはキャンプ場にいる。寝袋とマイ食器はもってきた。どんな仕事でも手伝うつもりはあったが、動機はいまいちあいまいだった。

で、昼はサッカー、夜は酒。無意識でやっているのはカラダだけか。が、とくに外国人は反G8やデモのことには真剣だ。でもその会議が終わると、リラックスする。ぼくはそのときを待つ。マッシューやエリーらと酒を飲む。飲んではしゃべり歌う。これがキャンプというものだ。「ブンブンブン蜂が飛ぶ」のようなフランスの歌、「ソーラン節」などの日本の歌、国際的なまさに「インターナショナル」といった歌がとびかう。〝居酒屋こいけ〟で午前二時、三時までも騒いでいる。

明日はピースウオークだという前夜も飲んでいた。午前三時すぎまで宴は続いた。若いみんなはデモに行く。ぼくははじめからデモに参加する意思はない。若いものにまかせておけばいい。ゆっくりと中小屋温泉ですごすつもりだ。そんなことをいいながら、飲んでいた。そして、校舎の廊下でぐっすりと眠りに入った。

翌日、一〇時ごろだろうか。校舎内に流れる音楽で目がさめた。キャンプ場の騒がしさが薄れていた。多くの人たちはすでにデモにむかって出発したらしかった。朦朧とした中で、ぼくは考えた。行かなくていいのだろうか。こんな自分でいいはずはない。

はね起きた。

大通の集会場には五千人ばかりが集まっていた。マッシューらのグループがいた。自分たちの意思を主張する旗をもって、真剣そのものの表情だ。今朝方まで飲んでいた仲間とは思えない。近寄りがたい。

デモ開始の直前に、ぼくらはNGOのパペット隊に入った。隊長のデビッドが演じかたを説明し、役割分担をしていく。マッシューが近づいてきて、いった。

――あんた、ネンネじゃなかったの？

このキャンプを通じてぼくは、自分でない自分が自分になる過程を歩んでいた。

キャンプ「雑感」

白石嘉治

矢部史郎は八〇年代のベルリン・アウトノーメについてつぎのようにいっている。「若者たちは占拠したビルに電気を引き、部屋を割り振り、みなが集るためのパブを運営し、ビラやパンフを印刷し、そうしたすべての実践をスクウォッターの評議会で決めていく。スクウォットは拡大し、発展し、一画がすべてスクウォットハウスで占められる地区ができあがっていく。そこから職場に通い、パーティを開き、討論し、デモに出かけ、ネオナチを襲撃する。警察車両を破壊し、大企業の船や自動車を焼きうちし、そうした実践の報告を印刷して撒く。」（「野蛮人になるために考えたこと」、矢部史郎・山の手緑『愛と暴力の現代思想』青土社、二〇〇六）

廃校になった小学校を使った「キャンプ」は、どこか矢部が語る「スクウォット」の様相を呈していた。札幌から電車を乗り継ぎ、無人駅でおりる。茫漠とした田舎道に点在する町村何某のポスター。歩いていると不安になるが、ベルリンの街路も千年もさかのぼればきっと似たようなものだったのだろう。そしてキャンプが忽然とあらわれる。スクウォットは都市に寄生しているのではない、キャンプ=スクウォットこそ、都市の起源である、といった妄想がよぎる。じっさい、校庭に点在する住人たちのテントは、都市に住まうことの原質を感じさせてくれていたし、居酒屋や食堂があり、なにより遊戯にふけり言葉を交わすひとびとがいた。それらはいずれも都市に不可欠な要素である。

ケン・ローチの『この自由な世界で』で描かれるように、現在のヨーロッパでキャンプ用地に定住をしいられているのは貧しい移民である。だが、キャンプが都市の起源であるとすれば、都市はそうした移民たちのためにあるのだろうし、ベルリンに流れついた「野蛮人」たちはみずからの住処を守るために、侵入する警察の装甲車にたいして「バリケード」を築いたという。それは「よそ者の侵入を妨げるためではなく、よそ者がよそ者であり続けるための、そして未だ見ぬよそ者たちをあらたに招き入れるためのバリケード」であり、その内部には「膨大な量の移動が内蔵されている」のである（同前）。

キャンプを訪れた翌日、札幌の街路で「G8大学サミット」に反対するビラを配る。大学を資本のロジックに押し開くことが目論まれていた。しかし、大学とはもともと中世の都市に知識をもとめて群れ集う「よそ者」たちの組合である。当時の都市は城壁をめぐらして自治を獲得していたが、大学はそうした都市にたいして、さらに組合という「バリケード」を築くことで都市のローカルな自治を普遍的な境位へと高めていった。その折り畳まれた「移動」のポテンシャルこそ、サミット体制の統治に敵対するものであり、いまでも学生や教員はベルリンの「野蛮人」や移民たち（ケン・ローチは正しくも、それを亡命してきた出版人の家族に代表させていた）と同じ歓待の記憶を生きているはずである――そう感じながらビラを配った。札幌のひとたちは信じられないほど受け取ってくれる。都市と大学の起源としてのキャンプがそこにも回帰していたにちがいない。

予示的政治としてのオルタナティヴ・キャンプ

渋谷　望

僕ら――僕と連れと一歳半の子ども――はまず当別、そして豊浦のキャンプに行った。それらはデモのベース基地の役目を果たすと同時に、海外のアクティビストを歓待し、人々と交流する場として機能していた。

キャンプで何よりも重要なのは、それが自由であるということを身をもって満喫できる空間だということだ。自由とは身体感覚であり、自由を経験したことがないとそれがわからない。日常生活のなかで私たちは不自由とはどういうことか身をもって知っている。しかしそれはかならずしも自由が「わかる」ことには繋がらない。自由とは個人に属するものではないのだから。自由の経験を保証する空間をいわば共同作業で作り上げることではじめて自由は保証される。だから自由は共同的、政治的営為に属する。キャンプはただの収容施設ではなく、自由を共同で作り上げる空間である。オルタナティヴ・キャンプではそれが実現されていた。

警察はもちろん行政やマスメディアからも干渉されない。ワークショップが開催され、デモの戦術が練られる。バナーをつくり、シルバー・ブロック（ドラム隊）の練習がある。手が空けば共同炊事を手伝う。会議は誰でも発言でき、徹底した水平性（上下関係のなさ）が貫かれる。通訳を介するので議論は長引いたが、逆に意見を明瞭にする必要が意識させられ、それもいい経験だった。セイファー・スペース（女性やクィアにとっての安全な場の確保）の試みもあった。僕はドラムの経験があるわけではないのにシルバー・ブロックに急遽参加した。もちろんこれらすべてがうまくいったわけではないが、さまざまな試みが実験され、ぶつかりあう。そして自分で勝手に設定していたリミットが解除される。こうした経験は楽しかった。

予示的政治 prefigurative politics という言葉がある。近年のオルタグローバリゼーション運動の性質を表わす言葉であり、運動が社会変革の手段ではないという意味がこめられている。運動は手段ではない。だからといって「目的」でもない。運動自体が来るべき社会のあり方を予示的に体現しているということだ。たしかに理想論に聞こえるが、オルタナティヴ・キャンプを経験してみると、それがたんなる理想論ではないことがわかる。もう一つの世界はすでにここにある。そして権力が最も恐れるのはこうしたオプティミズムである。

ところで僕らは子連れで参加したので憶えている人も多いのではないかと思う。子どもの世話をしなければならないのでフル参加はできない。しかしさまざまな参加の仕方があってもかまわないと考え、あえて子どもを連れて参加した。しんどかったが、子どもの世話を手伝ってくれる友人たちも出てきて助かった。

わたしにとってのキャンプ

本多さゆみ

北海道の洞爺湖でサミットが開催されると決まった2007年の春くらいから、洞爺湖近辺に勝手に押し寄せてくる遠方各地の人たちと一緒に、キャンプをしたりデモをしたりする日が来るのを楽しみにしていました。楽器を鳴らす練習をしてみたり、バナーを作ってみたり、ピエロになってみたりして、どんな表現を用いようかと着々と準備をしていました。それから1年弱、今年の3月に、札幌にキャンプを設置するための協力者を見つけられなくて右往左往する仲田さんを見かけました。7月5日に札幌で一番大きなデモがあることが決まっていたから、多くの人は札幌に滞在してから洞爺湖に向かうだろうと。札幌で滞在する場所がなくて、そこで排除をされてしまうのは困るだろうと。だとしたら、自分が札幌圏の協力者への橋渡しをして、札幌キャンプの運営をやるしかないと決心しました。自分が札幌でキャンプの運営をやるということは、洞爺湖近辺のキャンプやデモに行くことを諦めることになるので、枕を涙で濡らす日もありました。

もうひとつ、札幌でキャンプをするということは、自治体やバランス感覚のある大人たちと協力しなければできないので、原則的な反G8運動から遠ざかることだと、即座に思い込みました。つまりオルタ・グロバリ・ムーブメントの広がりがない日本で、さらに一地方都市の札幌圏で、地元の人々が主体になって幅広い人たちから賛同を得るキャンプを設置するためには、脱中心的でフラットなリゾーム状のネットワーク型組織などの、G8サミットのあり方と対抗する理念を押し通すわけにはいかないだろうと思ったのでした。

「セイファースペース」という考え方を知ったことがわたしの励みになりました。サミットへの直接的な異議は前面に出さないものでも、多様な人が共生するための場所づくりをすることで、そのプロセスと結果がサミットとは違ったやり方を「今、ここで」示すことになると念頭におき、実行委員会の事務局長をやりました。キャンプにやってくる先鋭的な意識を持った人たちの間の共生だけではなく、サミット体制に抗議の意志を元々持っている人と、そうではない人との間の共生を目指すものでもありました。世代間の協力等さまざまな幸運が重なって成功した「当別型」キャンプの運営は、「サミット体制」へのオルタナティブとして、学ぶべき点がものすごく多くあり、わたしたちが得たもの・生んだものは大きいと思います。参加したみんな、支えてくださった方々に心から感謝します。

当別キャンプ実現への道程

池田　賢太

「札幌でこのキャンプをやりたいのです。」

ハイリゲンダムのキャンプの資料を示しながら、栗原さんと仲田さんは言う。その規模は数千人から一万人。一体、どこで、誰がやるというのか。直感的に無理だと思った。

とりあえず、客人の機嫌を取ろうと「ぜひやりましょう。」と相槌を打った。

そのキャンプが突如、襲いかかってきたのは、札幌実行委員会の設立総会前日の夕方だった。

「明日、設立総会を行う。ドイツでは法科大学院生も活躍していた。ぜひ、協力してほしい。」

仲田さんからの電話は、あまりにも唐突だった。とりあえず、できる範囲で協力することと、明日の設立総会には参加する旨お伝えし、電話を切った。

設立総会は20名程度が出席。まず、各々のキャンプへの期待を織り込んだ自己紹介が始まった。「やられたっ!」前日の仲田さんの電話では、顔を出すだけで良い、無理だと思ったら抜けてもらって構わない、とのことだった。しかし、サミットまでは約2か月。ここで自己紹介をしてしまったらもう抜けられないな。私は、腹をくくることにした。

それから、実行委員会にはほぼ毎回参加した。時には、市役所交渉に立ち会わせて頂いた。

開催ごとに人が増える実行委員会の会議は楽しかった。とりわけ、札幌市との訣別を決めたときの会議が印象深い。市の提示した条件を受けて共にやるか。それとも、ゆずれない一線を死守して独立してやるか。このキャンプの性格を決定づける会議であった。

それまでの実行委員会は、事務局からの報告を受ける場所であった。事務局から降りてきた情報の一端をこねくり回しているような印象であった。しかし、この会議は違った。短い時間だったが、キャンプの意義について、メンバーが自分の言葉で想いを語った。その想いは、ゆっくりと練り上げられ、札幌市との訣別という合意を導き出した。素晴らしい合意形成過程であった。

この会議でメンバーの意識も飛躍的に高まった。その結果、インフォセンターもキャンプもスムーズに場所が決まり、一気にキャンプへ向けて突っ込んでいったのである。

サミットは、私たちに新たなネットワークと行動力を与えてくれた。心からの感謝を示さねばなるまい。

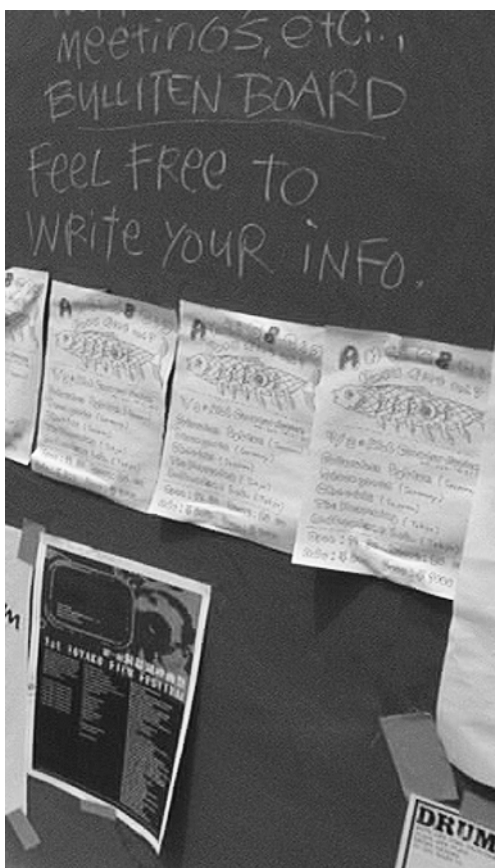
私たちができる恩返しは、引き際を見失ったG8に引導を渡してやることだろう。この夏を忘れなければ、必ずその恩返しはできるはずだと確信する。

今、ここにあるもう一つの世界

橋本まほろ

「オルタナティブな世界の実践」という意義に惹かれて参加した国際交流キャンプの日々は、見るものふれるもの全てが新鮮でした。

キャンプが始まってからは「反G8」アクティビスト達の持つ色を知り、彼ら(彼女ら)が怒り、傷つき、またそれを表明するためにここへ集まっているということを目の当たりにして、自分がいかにぼんやりとしたG8国の住民であったかを知りました。なぜ旗は黒いのか?なぜテントサイトにファミリーやクィアといった仕切が必要なのか?なぜミーティングでは皆シリアスな顔をしているのか?そのキャンプ地は始め、多様性をうたっていた割には、だいぶ偏っているように見えました。かといってその何故何を直接聞いたり、議論するようなことはなかなか出来ず、モヤモヤした気持ちで雑務に追われていました。

そんな中「日本の原子力産業は戦争とつながっている」というワークショップの案内に笑顔が書かれているのを見て

「なぜ、笑ってられるのか?」という問いがあり「では、なぜ怒っているのか?」というやり取りがありました。限られた時間、少しだけの議論でしたが、とても大事なことのように思いました。私たちは、もっとこのような話をしていくべきではないか。隣の人に話し掛けて、色や好み、主張の違いを交換する。互いに影響され混ざり合っていく。私がワクワクしていたオルタナティブな場はそういうイメージだったのではないか?とキャンプ中ぐるぐると考えていました。

キャンプが終わってからは、会議や飲み会の席で、活動家ではないみんながキャンプに関わる中でG8に対しての認識を変化させていった話を聞くのがとても楽しかったです。

一年ほど前に私は「六ヶ所村ラプソディー」というドキュメンタリー映画を自主上映しました。その時は、世界と自身は良いも悪いもどうしようもなく繋がっているという糸口をつかんだような感覚で、そうであるならば、変化し続ける人間に希望があるのだろうと思いました。

私にとってのキャンプは、これから私や世界が変化していくために必要な、オープンな議論や対話を学ぶ場だったと感じています。オルタナティブな世界は、私の外側にも内側にも存在していました。そしてこの夏に出会った様々な立場の様々な年齢の人達は、やわく、強く、変化する。私にとってはとても勇気のもらえる繋がりでした。札幌の底力を知り、これからもここにいることがとても楽しみです。

キャンプに参加して

本藤　丈博

このキャンプの実行委員をしている友人から情報をもらい、今回参加してみました。習い事で英会話をやっている事もあって興味を持ち、国際交流が目的で参加してみましたが、キャンプの趣旨に関しては何も知りませんでした。初日に会場へ行った時に初めてこのキャンプの目的と、食事は完全菜食だという事を知りました。私自身とは思想的立場が違うので、実行委員の方々やここに参加する外国人とうまくやっていけるか幾分不安もありました。自分が知らない世界を見るのも悪くないと考え、間接的に運動に協力するスタンスで最後まで参加する決心をしました。

会場では開設した居酒屋を手伝いつつ飲みながら、他の参加者と色々な話で盛り上がったり、つたない英語とフランス語を駆使して海外の参加者とコミュニケーションを図りました。その甲斐があって、二人のフランス人と一人のオーストラリア人の話友達を作る事が出来ました。オリエンテーションにも参加して、実行委員と海外からの参加者とのやりとりを見物したり、活動している方々の体験談を聞いたりしました。国籍の違いや言葉の壁が原因で言い争いになる局面もあって内心ヒヤっとしましたが、それを乗り越えて土曜日のデモに一丸となって取り組める事が出来たのは、参加者全員にとって素晴らしい体験になったのではないでしょうか。

当日、私はデモには参加しませんでしたが、キャンプで知り合った方々の闘う姿を見届けたいと思い、大通公園までデモを見物に行きました。こうしたデモ活動に対して私自身も偏見があったようで、顔をしかめて声を張り上げて抗議を続けるといったイメージがありました。でも実際は、ユーモアをたっぷりと取り入れて踊ったり警官をからかったりと、とても楽しそうにやっているのが印象的

でした。初めて参加した人たちも、皆「楽しかった。」と言っていました。逮捕者が出てしまったのは残念でしたが、打ち上げでは大いに盛り上がり皆と飲んだお酒はとても美味しく、貴重な体験が出来てとても有意義でした。

最終日には、次のキャンプ会場に行く方々をお見送り。短い間だったけど、国境を超えて知り合えた人達とお別れをするのは少し淋しい気持ちになりました。

“Have a nice trip. Good luck!”

言葉を掛けながら握手を交わして、彼らの旅の無事を祈りながら笑顔で手を振って帰りのバスを見送りました。

最後に、キャンプについて親切に案内していただき、様々なお世話をして下さった実行委員の皆様に感謝の意を表し、締めくくりにしたいと思います。

当別キャンプ

後木　一哉

自分がこの実行委員会にかかわり始めたのは、友人から炊き出しを行うフードコレクティブを手伝ってほしいと言われたからだ。そのとき渡されたプリントを読むと、鍋釜、材料、人手が足りなくて募集しているようだった。もともと環境問題やグローバリゼーションの問題には関心があり、サミットに対してのアピール行動などにやってくる活動家たちの支援をするのは意義があると思っていた。

6月4日の運営会議から参加した。キャンプの場所提供に関して札幌市との交渉が難航しているとのことだった。あと一か月もないのに結構大変な状況だと思った。それから色々あり、当別で会場設営が始まったのが7月1日。少ない時間の中でよくみんなあれだけできたと思う。すごいことだ。

フードコレクティブの手伝いは準備の会議でアイデアを多少出したことと、キャンプで食べた後の皿洗い方法やゴミ処理方法などを考え、環境を整えたが厨房の手伝いは出来ず、実際に調理に当たったメンバーは大変だったと思う。申し訳ない。キャンプの飯は完全菜食だったが、良い味で盛り付けもきれいだった。肉がほしいとは思わなかった。

自分の反省点としては、人手確保が遅く、準備も後手後手だったということ。7月1日の現地設営初日朝に家族に手伝ってもらって街宣車カンバンに目隠しの布を巻き、仮設トイレレンタルの契約と支払いをし、某大学でテント積み込み、ホームセンターで備品買出し、段ボール集めなどをしながら当別に向かった。着いたのは夕方だった。何てこった…

早めに人手の手配をしておけば良かったと思った。当別町内の医療大や当別エコロジカルコミュニティーなど、もっと広報できたのではないかとも思う。

とは言え、少ない時間の中で北海道と全国からきた仲間、世界の仲間がつながれる場がつくれたのは自分にとっても大きな収穫だったと思っている。

つながっていく場所

堀越えりか

私がキャンプを知るきっかけになったのは、『セイファースペース（〝より〟安全な場所）って何？』の公開講演会へ行った事です。キャンプの中がより安全な場所になる事、前年のドイツ ハイリゲンダムのキャンプのスライドと説明を聞き、フードコレクティブの案内を目にしたことです。その1枚で私にも何か出来るのかなと思いました。自分の現在いる狭い場所とは違う場所であることに興味を持ちました。

実行委員会の会議は私が考えていたより数段ハードでついて行くだけで、精一杯になってしまい、会議の場所へ行くのが辛い日もありました。それぞれの人がとても忙しいにもかかわらず、私に声を掛けてくれた人がいました。その人が声を掛けて下さったおかげで、自分が決めて参加した事を忘れていたのを思いだしもう一度 私自身が出来る事はなんだろうと思い、7月2日のパーティの完全菜食主義ビーガンのお料理を手伝いに村上さんのところへ行きました。手伝いをしながら、自分がテキパキ出来なくても、あせらないで私のペースを守り、出来る事に専念するのが、いいことかな…と思いました。

初めて顔をみる人がたくさんで名前もわかりませんが、野菜を洗う時に手をかしてもらえ嬉しかった事もありました。キャンプに参加してみてよかったと私は改めて思いました。俊敏な反応が出来なくて残念！と思うこともありました。

器具がそろっている調理室での作業と野菜の下ごしらえの作業は外で屋根つきのテント内で会議用のテーブルを数台にまな板を敷き、皮をむいたり切ったりをキャンパーや、東京と札幌のフードスタッフの人で会話をしながら作業をしました。また、ゆでたての山のジャガ芋の皮むきもしました。野菜を洗う時に水を溜めて洗えばよかったと反省をしています。前後しますが私は農家さんへの発注・配送・設営など作業は手伝えませんでした。ごめんなさい。

私、緊張してしまうと、ガチガチになり会話がままならなくなり、最後になり、ほんの少し話しが出来ました。私はいろいろ人に助けてもらい、たくさん学ぶ場になったキャンプでした。ありがとうございました。

でもやっぱり、キャンプ

菰田 真介

去年の9月ごろでしょうか、2007年ハイリゲンダムサミットの抵抗運動に参加した有志の人たちと交流を持つことによって、キャンプの存在を知るようになりました。 年が明けて2008年2月ごろ、彼らから札幌、洞爺湖付近でのキャンプ実現のために北海道へ行かないかという誘いを受けました。

ちょうどその時私は暇だったということもあり、4月から7月まで札幌に滞在することになりました。彼らからドイツでのデモの話を聞いて楽しそうだなとは思っていましたが、絶対にキャンプをやりたいという積極的な思い入れは、当時はそれほどなかったのかもしれません。

今になって思い返してみると、はじめのうちはキャンプとはなにか、よく理解していませんでした。徐々に民主主義の実験場としてのキャンプという空間の意義を理解していったような気がします。

計画当初はスクワットでもいいと考えていましたが、私がキャンプを実現させたいと思った最大の理由は、ここまで来て頓挫するとみんな落ち込むよなーと思ったからです。

結果的には当別町が見つかってよかったと思いますが、もし今回キャンプが実現されなかった場合、おそらく何らかの形でスクワットができただろうという話を聞いています。私はキャンプとスクワットは、本質的には同じものだと思います。違いがあるとしたら後者のほうがより敵対性が可視化されていると思いますが、とはいえ、根底にある敵対性は共通のもので、ただその空間を得る手続きが、ある明確な対立構造を生むか否かだと思います。

もしスクワットができていた場合、そのこと自体には政治的な意味があると思いますが、支援する側は疲弊するでしょうから、結果的にはよかったんだと思います。何より今回の「オルタナティヴ・ヴィレッジ」運動の最大の成果は、札幌での運動に携わる人間関係のつながりはできたことだと思います。それはキャンプだからこそなしえたものだと思います。

当別キャンプで「もうたくさんだ！夢を語らせろ」と管を巻

居酒屋こいけ

傍若無人なサミッターを取り囲むために世界中から数千人の棒弱無人な人々が来ると栗原さんが言うので、キャンプをやることにした。

キャンプがどんなだったかは他の人の文を読んでもらうとして、キャンプはもともと楽しいものだから、当別キャンプも案の定楽しいものだった。

じつを言うと、私は去年世界中の人たちとキャンプらしきことをした。

それは仲田さんのように、ハイリゲンダムキャンプではなく、エスペラント横浜世界大会というものだ、そう僕はエスペランチストなのである。

去年の8月にアマスロヂェーヨという5泊900円の簡易宿にポーランドやらベルギーやらスロバキア、パキスタンの人達と過ごした。

今度のキャンプも同じ雰囲気だろうと思ったが、意に反して同じだった。

さてそろそろ夢を語らねばなるまい。それはエスペランチストの仲間と寺小屋みたいな学び舎をつくって、循環型のライフスタイルの実験を併せてする事だ。

そういう場所が世界のどこかにぽつぽつとできて、船を共有して世界中を山手線にする事だ。

そして、数十年後のガキがおふくろにこう言う。

「かあちゃん、ちょっくら、ブラジルに行ってくるわ」

「どのくらい行ってるの」

「2年ぐらいで帰ってくるよ」

当別キャンプはこんな夢を見させてくれる場所だった。

オルタ・グローバリゼーション運動とキャンプの歴史

仲田教人＋栗原康

反グローバリズム活動家

「反グローバリズム活動家」。禍々しい響きがする。この禍々しさは、公安警察の広報活動とスペクタクルを期待するマスメディアによって、昨年の夏から洞爺湖サミットに向けてあおられてきたものだ。街頭に出て、G8サミットそのものに異議を唱えようとする人びとのことを、政府・警察は過度に（しかし意識的に）警戒していたし、恐れていた。警察・メディアのキャンペーンの中で、「反グローバリズム活動家」という記号に節合されたのは「暴力」のイメージである。反グローバリズム活動家とは、時代錯誤な左翼的主張の持ち主であり、過激なデモ、投石、商店や銀行の破壊、座り込みによる公道の占拠といった違法行為を目的とする人々であるかのような報道が繰り返された。そして洞爺湖サミットでは、このような人々が世界中から北海道に結集するおそれがあり、地元の「一般市民」に影響が及ばぬよう、かれらの暴力や迷惑行為に対しては断固とした処置をとらねばならないとされたのである。

「サミット体制」とはなにか

アメリカやヨーロッパと比べると、日本では反グローバリズム運動はポピュラーではないと言えるだろう。反グローバリズムと聞くと、排外的な主張であるかのような印象を持つかもしれないが実際は違う。この運動は、多国籍企業の利益のための貿易の自由化や規制緩和といった、新自由主義的な社会再編に反対しているのであって、あらゆる社会統合に反対しているわけではない。むしろ、国家主導でも企業主導でもない、民衆による「下からの」社会統合によって、「もう一つの世界」を実現させることを希求する運動である。ゆえにこの運動は、「オルタ・グローバリゼーション運動」とも呼ばれる。それでは「サミット体制」という視点から、新自由主義的な社会再編（新自由主義的グローバリゼーション）について整理してみよう。

サミットとは先進諸国の首脳が集まり、世界の政治経済の動向を決定するトップ会合のことである。サミットが誕生したのは

１９７５年。フランスのランブイエで開かれたのがはじまりである。当初議題とされたのは国際通貨の安定であり、これはサミットの目的を非常によくあらわしていた。サミットのきっかけとなったのは、１９７１年のニクソンショックである。ニクソンショックとは、当時のアメリカ大統領ニクソンが、とつぜん国際通貨体制の基軸であった「金＝ドル本位制」を放棄すると宣言した事件のことをさす。第二次世界大戦後、世界経済は圧倒的な経済力を誇るアメリカを中心に築きあげられてきた。国際通貨の仕組みも、強いアメリカのドルと金との交換を軸とし、それにリンクさせて各国の通貨価値を定める固定相場制をとってきた。この通貨体制はアメリカのブレトンウッズではじまったため、「ブレトンウッズ体制」とよばれる。だが１９６０年代末、アメリカはベトナム戦争のために大量の赤字国債を発行し、歯止めのないドルの海外流出を招いた。ドルの実質的価値は下がり、国際通貨を支えるだけの力を失った。負担に耐えきれなくなったアメリカは金・ドル交換制を放棄し、30年間続いた「ブレトンウッズ体制」を崩壊させたのである。

これにかわって、１９７３年から先進諸国は変動相場制に移行した。サミットの目的は、アメリカ一国だけではなく先進諸国の協調体制で、この為替制度を管理することにあった。変動相場制が象徴する意味は大きい。この制度は、国家がその主要機能である通貨への規制を放棄することを意味していた。通貨価値は国家の手をはなれ、グローバルな市場取引の結果に左右される。予測できない為替変動は、その上下の差額に利益がめばえる余地を生みだした。通貨そのものが売買の対象となり、今日では投機マネーの暴走を招くまでにいたっている。もちろん、規制緩和が進んだのは通貨ばかりではない。変動相場制は、通貨に象徴される資本の自由な動きにたいして、国家の規制をかけないようにすることを意味していた。農産物の輸入自由化、民営化、労働の柔軟化。サミット結成後、各国は

オルタ・グローバリゼーション運動とキャンプの歴史

労働者や小農民、社会的弱者を保護するためにもうけられていた資本規制をどんどん緩和していった。これは労働力コストのかかる福祉国家を解体し、大企業の利益を最大化する仕組みを整えれば、あらゆる国が豊かになるという新自由主義の理念に沿うものであった。1980年代にはいると、サミットは参加国で新自由主義を広めるとともに、IMF／世界銀行をつうじて第三世界への企業進出をサポートし、1990年代にはアジア諸国も制することに成功した。こうしてサミットを起点として、先進国の協調体制で資本の自由化をはかる「サミット体制」が築かれた。

オルタ・グローバリゼーション運動の歴史と「勝利」

このような「サミット体制」に対抗する運動が、世界的にとくに注目を集めたのは、1994年のメキシコ・チアパス州における、サパティスタの蜂起である。メキシコもそこに含まれるNAFTA（北米自由貿易協定）が発足したこの年の1月1日に、サパティスタ民族解放軍（EZLA）は「NAFTAは先住民族への死亡宣告である」「もうたくさんだ」と宣言して武装蜂起した。さらに、全世界から六万人が抗議行動に集まり、閣僚会議そのものを流会させてしまった1999年のシアトルWTO闘争以降は、G8サミットやIMF／世界銀行総会など、新自由主義的なグローバリゼーションを推し進めようとする国際会議が開かれるたびに、その傍らでは大規模な抗議行動が発生してきた。主要なものだけでも、2000年のプラハIMF／世界銀行総会対抗運動、2001年のジェノヴァサミット対抗運動、2003年のエヴィアンサミット対抗運動、カンクンWTO闘争、2005年のグレンイーグルズサミット対抗運動、香港WTO闘争、2007年のハイリゲンダムサミット対抗運動、シドニーAPEC対抗運動、などがある。(注)

シアトルをはじめとして、これらの対抗運動がまず人々の目を引いたのは、動員の大きさと、そこに参加する団体・個人の多様性であった。それまで利害を異にするか、相反する利害を持つと思われていた人びとが手をたずさえて、新自由主義的なグローバリゼーションに異を唱えはじめたのである。環境保護運動、労働運動、移民運動、農民運動、平和運動、反原発運動、先住民運動、消費者運動、債務帳消し運動、アナーキスト、キリスト教グループ、学生運動、セクシャル・マイノリティ、挙げていくと切りがないが、多様な政治的主体がその多様性を損なうことなくネットワークが構築され、共同行動が組まれてきた。

これらの対抗運動は、多くの場合、新たな貿易協定の締結を妨害することに成功し、超国家機関や各国政府にさまざまな政策提言を呑ませてきた。こうした対抗運動が、G8サミットやWTO、IMF／世界銀行のような機関の役割そのものを終わりにさせつつあるとみる人びとも少なくない。だが、オルタ・グローバリゼーション運動にとっての勝利とは何かを考える上で、さらに重要な観点は、人びとが運動の実践の中で、「サミット体制」とは異なるどのような世界をつくりだせているのかということである。

オルタ・グローバリゼーション運動の有名なスローガンに、「もう一つの世界は可能だ」というものがある。この運動では、資本主義的な社会秩序に代わるさまざまなオルタナティブズを、運動内部で実践できるかどうかが重要な賭金となっている。運動の勝利をはかる指標は、参加者たちが望ましいと思う社会を、「革命の後に」ではなく、「今、ここで」実践できているかどうかにあるのだ。長い間、社会運動の勝利は、政権の奪取や制度の獲得といった成果によってはかられてきた。運動は目的のための手段であるとされ、運動内部における権威主義的な指導体制や差別の再生産は、革命や勝

利の後に解消されるものと見なされるか、たんに黙殺されてきた。しかし、オルタ・グローバリゼーション運動では、目的が手段を正当化するという思考は拒絶され、運動内部での民主主義の実践こそが重要視されるのである。

実際、サミットやWTOなどへの対抗運動においては、世界中から集まった見知らぬ者同士が、その場で会議を開き、共にアクションを企画することになる。そしてそこから、より平等な意思決定の方法や、多様で新しい抗議行動のスタイルが発明されていく。「サミット体制」がグローバルエリートたちによってあらかじめ決められたアイデアを、トップダウンで実行していく世界であるのだとしたら、オルタ・グローバリゼーション運動は、人びとがその場の話し合いから、新しい政治のあり方を自由に実践していく世界であるといえる。

注）

また、2001年には世界社会フォーラムが開かれ、その後も原則として年に一度開かれながら今日まで継続してきた。毎年ダボスで開かれている、グローバルエリートたちによる世界経済フォーラムが、新自由主義的なグローバリゼーションをいかにして推進するかを話し合う会議であるなら、世界社会フォーラムは民衆の立場からその問題点を話し合い、考えるための会議である。このフォーラムは世界中のNGO、NPO、社会運動団体が連帯を紡ぎ上げ、ネットワークを構築するための重要な機会ともなっている。

キャンプという対抗文化の発明

オルタ・グローバリゼーション運動は対抗文化の実験室である。この運動では、世界中で発明されたさまざまな対抗文化がリレーされてきた。それぞれの地域の歴史的な経験があり、それが新しい世代に引き継がれ、アレンジされながら他の地域に拡がっていく。キャンプもまた、オルタ・グローバリゼーション運動の発明品である。反サミット運動において、最初に大規模なキャンプが出現したのは、

２００３年のエヴィアンサミットであった。そのきっかけとなったのは、２００１年のジェノヴァサミットである。このとき、ジェノヴァ市には三十万もの人々が結集し、大規模な抗議行動がくり広げられた。当然、市内の宿泊場所は不足し、人びとは公園など公共施設の占拠におよぶ。その結果、街のいたるところで警察との衝突が起こり、混乱状態が生じた。そのような状況の中で、対抗運動への警察の弾圧は激しさを増していき、ついにはデモの参加者である十八歳の若者が射殺される事態を呼んだのである。ジェノヴァ以来、抗議行動の激化による混乱を避けるために、サミットそのものが都市部でおこなわれることはなくなった。だがサミットがどこで行われようと、人びとは会場をめざして移動することをやめない。サミット開催地の近隣自治体は、好むと好まざるとにかかわらず、かれらを受け入れざるをえないのだ。このような経緯から、エヴィアンサミットでは自治体がキャンプ地を提供し、それを運動側が運営するという方式がうまれた。治安管理という目的から、自治体が対抗運動との「協働」を積極的に選択するこのスタイルは、２００５年のグレンイーグルズサミット、２００７年のハイリゲンダムサミットで改良を重ねながら定着してきたといえる。

反サミット運動において、キャンプは多くの点で重要な意味をもつ。まずキャンプは、不特定多数の人々の「移動」を受け入れる宿泊地として重要である。事前の予約を必要とせずに宿泊できるキャンプ場の設置は、運動をより多くの人々に開かれたものにし、群れを大きくする。また当然のことながら、サミットが都市部から遠く離れた場所で開催されるため、キャンプは会場をめざす抗議行動の出撃拠点としても重要である。しかし、ここまでなら、過去の日本の運動シーンにおいても何度も発生してきた「テント村」との差異がないように思える。だが従来の「テント村」においては、しばしば軍隊的なトップダウン型の組織化や、差別的な男女の性的分業が再生産されてしまう傾向があり、そこでの生活のあり方や民主主義の実践自体が目的として追求されることは少なかった。

キャンプは、上述した「もう一つの世界」を実践する「実験場」として重要なのである。たとえばキャンプは、女性やセクシャル・マイノリティが安心して過ごせるような空間でなければならないし、会議で誰かの意見に耳が傾けられなかったり、労働が押しつけられたりしてはならない。数日間の共同生活のなかで、会議や共同作業の機会をつくるという意味では、キャンプはオルタ・グローバリゼーションの理念がもっとも試される取り組みであると言えるだろう。

以上、オルタ・グローバリゼーション運動とキャンプの歴史について概略してきたが、おわりに、今回の洞爺湖サミット対抗運動と私たちの取り組みの意義について考えたい。

オルタ・グローバリゼーション運動の上陸と「国際交流キャンプ」

洞爺湖サミットは、六百億円の税金の浪費と、空疎な宣言文を残して終わった。「サミット警備」にかかった総費用は三百億円であるとされているが、実際にはもっと多かっただろう。今回のサミットは「警察祭り」であり、「自衛隊祭り」であった。北海道には二万一千人の警察が集結し、イージス艦二隻およびその護衛艦十隻、F15戦闘機およびF２戦闘機、パトリオット・ミサイルが配備された。閣僚大臣会合がおこなわれた各都市でも警察の大動員がかけられ、サミット期間中の東京では不気味としか言いようのない数の警察が駅構内や街頭で「テロの警戒」にあたったと聞いている。私たちがキャンプの設置場所として札幌市に要請していた、河川敷や雪

捨て場は（洪水の危険があるから貸せなかったはずなのに）、機動隊の装甲車両の大駐車場として使用されていた。やりたい放題である。

このような警察国家の示威行動に比べて、対抗運動はいまひとつ盛りあがりに欠けたというのが、多くの人びとが抱いている印象ではないだろうか。たしかに動員の数からいえば、事前に期待されていたほどには対抗運動は盛り上らなかったといえる。もっとも大きな動員があったアクションは、札幌市でサミット開催の直前に行われた「チャレンジ・ザ・G８サミット 一万人のピースウォーク」であったが、参加者は五千人であった。（とは言うものの、この動員数は香港ＷＴＯ闘争よりも大きい）。マスメディアが最もスペクタクルを期待した、サミット会場付近での抗議デモには、数十人から三百人程度の参加しかなかった。

だが、今回の反サミット運動には、じつに多くの画期的な試みや創造があった。対抗運動の動員についていえば、２０００年に行われた沖縄サミットと今回のサミットには決定的な差異が二つあるように思える。ひとつは、今回のサミットでは「サミット体制」が推進してきた新自由主義グローバリゼーションそのものが批判の俎上に載せられ、様々な抗議行動が日本各地で多発的に起こったこと。そしてもうひとつは、欧米を中心として海外から多くの「有象無象」のアクティビストたちが日本に結集し、行動に参加したことである。もちろん、沖縄サミットのときにも対抗運動はあったし、海外からの参加者がなかったわけではない。だが大勢としては、沖縄サミットのときに対抗運動が焦点化したのは、G８サミットそのものというよりは「反基地」であったし、海外からの参加者は以前よりつながりのある団体間で招聘・派遣された人々がほとんどであった。今回の反サミット運動には、特定の個人や団体に招待されたわけではなく、数百人の「有象無象」たちが集まった。かれらは大きな期待を抱いて、オルタ・グローバリゼーション運動の新たな局面を創りだすために、海を越えて日本にきたのである。無数のかれらとともに、「国際交流インフォセンター」と「国際交流キャンプ」はあった。

「共」にあることについて

キャンプは、「公」（パブリック）である政府によって普段は「上から」管理されている空間を、「共」（コモン）に取りもどす試みでもある。デモが路上を祝祭空間にする実践であるなら、キャンプは公園や河川敷や廃校を祝祭空間にする実践であると言えるだろう。そこでは人びとは、（仮初めであるにせよ）生産手段をみずからのものとし、自分たちの意思決定を通じて価値を創造することができる。今日の資本主義社会においては、集団的で協働的な生産は、資本家の私有財産に変えられてしまうが、そこでは違う。今日の資本主義社会においては、知る、考える、感じる、愛するといった人間のあらゆる感覚、つまり生そのものが私的所有と交換の対象とされているが、そこでは違う。「共」にあることは楽しく、「共」にあることは創造的である。新自由主義は、人は集まったら殺し合いをはじめるという人間モデルを精神的な拠りどころとしている。だが、キャンプでは集まった人びとが助け合いをはじめるという光景が、そここにあった。

私たちのキャンプを訪れた人びとは、二百五十人程であった。数からすれば、やはり私たちの取り組みはささやかなものであったかもしれない。だが、そこには別様の生への欲望が肯定される空間があり、別様である世界の可能性を予示的にかいま見た人たちがいた。これが「国際交流インフォセンター」と「国際交流キャンプ」の意義の、ほとんどすべてであると思う。

札幌実行委員会というスタイル

国際交流インフォセンター／国際交流キャンプ札幌実行委員会が正式に発足したのは、２００８年５月19日。

この札幌実行委員会で私たちは得難い経験をした。

札幌実行委員会とは、どんな組織だったのか、組織や合意形成などのスタイルについて振り返り記録しておきたいと思う。

幅広い構成メンバー

とにかく幅広い年代のいろいろな人が集まった実行委員会だった。食や反原発、フェアトレードなどの活動に携わってはいても、運動という意識はあまりなかった人、デモやピースウォークに一度も参加したことがない人たちが、「非暴力、安心安全なキャンプ」というコンセプトのもとに、ともに設営準備を担った。「G8を問う連絡会キャンプWG」は、一構成団体として実行委に入っていた。

実行委としての意思決定をする会議は、誰でも参加できる運営会議のみ。この会議で、準備などあらゆることを話し合い、後述するが札幌市との共同設置についての結論を出した。

主体的な個々の動きをネットワークする新しい運動スタイルと従来型の責任の所在を明確にしつつ役割を分担していくスタイルの融合と言えばいいだろうか。それぞれに準備を進めつつ、この会議で進行状況を共有し、知恵を出し合った。テンポのいいにぎやかな会議だった。

札幌市との協力をめぐって

なぜ札幌市とやりたかったのか。

当初想定していた二千人規模のキャンプを設営するには用地確保やインフラ整備に行政の協力を得なければ難しい。加えて、警備強化が予想されるサミット期間中であることから、行政と共同設置することによって、圧力や介入を避けたいという思いもあった。同時に、札幌市にとっても、不測の事態を未然に防ぐというメリットがあるはずだった。なにより、おそらく日本でははじめてのケースになる行政と市民の対等な協力による国際交流キャンプを実現し、協働の新たな可能性を開きたいと考えていた。

こうした思いから、マスコミによるネガティブイメージを払拭し共同設置を実現するために、札幌市民による札幌実行委員会を設立したのだった。

交渉の詳細は省くが、札幌市がこのキャンプをどのように位置づけていたか、また、協働とはとても言い難い市民に対する姿勢について記しておきたい。

実行委員会正式発足に先立って4月から始められていた札幌市交渉は、本質的な論議がされないままズルズルと引き伸ばされ、6月9日、要請に対する拒否という形でいったん終わった。

その前後に、要請はいったん断るが、設置の方向で調整しているので、準備は続けて欲しいという話があった。周辺住民に漏れて反対の動きが起きては困るからと口外厳禁の指示があった。

この後2週間あまり、当初提示された農業体験交流施設さとらんど、変更後の西岡青少年キャンプ場の現地視察やバスの手配、必要なインフラの確認等々の作業をしながら運営についての具体的な話し合いをした。

札幌市は国際交流キャンプをどのようなものと考えていたか、提示された覚書（素案）「緊急避難キャンプ場の運営に関する覚書」は次のようなものだった。（資料参照）

キャンプの設置運営そのものがもう一つの世界を今ここで表現していくオルタナティブ・ヴィレッジの実践であることからはあまりにも遠く隔たっており、とうてい受け入れられるものではなかったが、運営会議に持ち帰り全員参加の話し合いで受入拒否の結論を出した。

決裂したことに悔いはないが、土壇場まで口外厳禁の指示を守って、予定地周辺の住民と直接話し合う機会を持たなかったことには悔いが残る。官の発想を変えていく可能性は、下からの民衆の力の結集にこそあることを、改めてかみしめている。

行動が思想を育てた

実行委メンバーの多くが反グローバリゼーション運動という認識のもとに集まったわけではなかった。

しかし、誰でも食べられるヴィーガン・フードやセイファースペースの概念、利用料ではなくカンパとして設定することなどについて話し合いながら準備を進める中で、キャンプのイメージや意義が自然に共有されていった。

札幌市の覚書（素案）の内容も、反面教師として作用したかもしれない。誰にも管理や監視、支配されない居心地のいい私たちの小さな村というイメージは、オルタナティブ・ヴィレッジそのものであり、札幌市の覚書の対極にあるものとして、全員の胸にストンと落ちた。

そして、キャンプで出会ったたくさんの人たち。通訳を介しながらの会議で、丁寧に互いの意見を聞きあい、ゆっくりものごとが決まっていく。みんなで野菜を切り、皿を洗う生活。モヒカンやスキンヘッドの若者たちとのフレンドリーなやりとり。心も体も無意識に内面化していたものから、解き放たれていく。

留守番以外のほとんど全員がピースウォークに出かけたのを知って、オルタナティブ・ヴィレッジの持つ力の大きさを再認識させられた。寝食をともにした生身の人との交流、皮膚感覚を通して存在にとどいた反グローバリズムの思想の確かさを実感している。

賛同金に助けられた財政

参考資料として、巻末に収支決算書を掲載した。

収入のうち、個人・団体からの賛同金がかなりのウェイトを占めている。当初予定していたファンドや大口カンパが見込めなくなり、赤字が避けられないかもしれないという危機感を実行委メンバー全員が共有して、賛同金の協力依頼やカンパ集めに奔走した結果である。

札幌市と決裂した後、急遽借り受けることになった当別災害備蓄センターには、必要なインフラがほぼそろっており、設備については仮設トイレと通信用カードくらいですんだこと、使用料以外の保証金等の要求がまったくなかったことで、支出も抑えることができた。

また、財政の窮状を知って、フードや利用カンパを多く出してくださる参加者も多数いたこと、余った食材を怒涛の勢いで売り歩いた実行委メンバーの努力についても付記したい。多くのみなさんのご協力によって成り立ったキャンプだった。得難い経験だったと、改めて思っている。

（文責：細谷　洋子）

緊急避難キャンプ場に関する覚書（素案）

- 名称は、「緊急避難キャンプ場」とする
- 甲（札幌市）が主体となって設置するキャンプ場の運営について、甲と乙（札幌実行委員会）が連携、協力する
- キャンプ場およびその周辺の警備員の配置
- 臨時的な訪問客の入場は認めない
- 札幌市と近郊の住民は利用できない
- 利用許可証とリストバンドの交付
- 場内ではリストバンドを身に付ける
- 利用者台帳を作成し、キャンプ場設置期間中は毎日甲に報告する
- 期間中場内を管理者（警備員含む）が巡回する

・
・
・

資料：札幌市から提示された覚書（一部）

座談会①

世代を超えて 〜キャンプという体験

中高年ズ（森山・七尾・細谷）

かかわったきっかけ

H みなさん最初からキャンプをやるつもりだったわけじゃないんですよね。若い人たちに「前期高齢者座談会」なんて言われてますが、その中高年世代の私たちが、関わったきっかけからいきましょうか。

M ４月末に、突然七尾さんから電話がかかってきて、共同代表をやってもらいたいという話があって、そこからですね。

N あぶないんじゃないかとか思わなかったですか？

M 全然思わなかったですね。Ｇ８サミットについては、その段階ではあまり深く考えていなかったのと、反対の立場を明確に出すのではなくて、そうじゃない考え方の人も受け入れるキャンプだと聞いたから、素直にそれを受け止めました。で、やっているうちに、だんだんＧ８というのはなんかおかしいな、こんなのはないほうがいいなという気持ちになっていきましたけどね。

N 私はＧ８に反対する人たちを受け入れる場を、きちんと提供しなくちゃならないと思っていたのね。ホンネはキャンプをきちんとしておかないと心配だということでしたね。海外から来るアクティビストを守ることと、交流もしたかったし。

H 昨年秋にロストックの報告を聞いていたし、市民フォーラムや市民メディアの動きもあったし、当然キャンプをやるだろうと思っていました。で、スタートが遅いなと思っていたところにＳＯＳが入ったのね。

札幌市との交渉

H 結局決裂したけど、札幌市との交渉についてはどう考えていますか。

N ６月９日に要請拒否の回答が出されて、でも設置するから準備は進めてくれという話が局長からあったんですよね。具体的な候補地の提示もあって、これは実現できると思ったんですけどね。

H 要請は、市が用地やインフラを提供し実行委員会が運営するという形で一緒にやりましょう、ということだったよね。６月９日の回答の後も、それ以前からの交渉の継続だと私たちは思っていたけど、実はそうじゃなかった。断りの回答をしながら根回しをしているから準備は進めろという話は変ですよね。根回しに時間がかかっているという理由なら、拒否じゃなくて回答期限を延ばしてくれという話になるはずなのに。後からその話は一度お断りしていると何度も言っていたのはそういうことだったんですね。

M あの時点では、ここまでやってきたんだから市が譲歩してくる可能性は残っていると思っていました。交渉の過程での仲田さんの、外国人などのキャンパーを受け入れる場所を市が提供することと、みんなが安心して過ごせる場であるために、僕らが責任をもって管理運営することとはセットになっている、という論理は非常に明快で説得的でした。

H 結局札幌市は国と一直線につながった警備体制の一環としてのキャンプ、警備面ではキャンプにひとまとめにしておいたほうがいい、だから市が設置し管理する緊急避難キャンプの運営を市民団体にさせようという発想だったんだと今なら思うけど、あの段階では札幌市そのものとの交渉だと思っていましたからね。

M 僕らも市に期待をかけすぎた。回答が出た時点で、大学のグランドなども視察しましたが、もっと積極的に自主設置キャンプの決断をしていたら、準備にもっと時間をかけることができたなと思いますね。

H 市に振り回されたとつくづく思う。少なくとも住民やマスコミに交渉の状況をオープンにして、直接話し合うべきだったと思います。もっと札幌市民を信頼するべきだった。

N 私は、個人的には、決裂か？そうしたら大通公園にイリーガルキャンプが張られて、わたしたちは、撤去されないように交渉したり、炊き出ししたりしなきゃ、と覚悟したの。

H この条件はのめるわけがないと交渉メンバーの意思は一致していたのに、運営会議に持ちかえって話し合いましたよね。全員参加の運営会議で一人一人に意見を言ってもらって決めた。そこのところが従来の運動スタイルとは大きく違うところかなと思いますね。

合意形成と意識の共有

M そこで当別の話が上がってきたでしょう。だから、全体の雰囲気が暗くないんだよ。このやり方は、キャンプでの会議の持ち方にも一貫していましたね、全体会議一本にして物事が動いて行ったとかね。

N そうできたのは、人数の面もあると思いますが。

M それもあるだろうけど、できることは必ずやるという姿勢がすごい。そういうやり方はこれまでの運動にはなかったと思うね。僕も勉強になりました。

N 今回すごくがんばってたのは、情報共有だよね。

H ＭＬ（メーリングリスト）というものがあったのは時代の恩恵ですねえ。

M 最初ＭＬってなんだかわからなかった。

N たびたび顔をあわせてやったし。

M 昔は顔見知りが核になって、そのまわりに同心円的な広がりができるというのが、普通だったんだけど。今回は初対面の人たちが圧倒的に多くて、そういう人たちと一緒に行動するなかでお互いに近寄れたというのもすごいことですね。

H 最初からキャンプというものを理解して集まってきた人たちというよりは、手伝ってと言われて参加した人たちもいたんですよね。その意味では、よくここまで意識の共有ができたなあと思いますね。会議以外にもいろいろな場でみんながコミュニケーションを重ねてきたけど。

M アクティビストだとか、イリーガルだとか、最初は僕の意識にないわけ。僕自身が関わっていくにつれて、イメージがだんだんはっきりしてきました。市との交渉で仲田さんが「自分たちだけではなめられる、一緒にいてくれるだけで相手側の態度が変わる」と言ったので本気になりました。市との交渉が決裂した後は、共同代表である必要はないわけですよ。一実行委員として何でもやろうという気持ちになってましたね。

N 札幌市との交渉が終了するまでと思っていました。これは中高年世代も一緒にやっている層の厚さを市に見せるためにね。

H 私も、若い人たちが自分のやり方でやればいいと思っていたので、市との交渉の目途がつくまでと思っていたんですけど、交渉が決裂したときの実行委員会で一人一人が「私たちの小さい村」なんて言うのを聞いて、最後まで見届けたい、一緒にやりたいと思うようになりましたね。

札幌の運動の人脈

M ５月８日に共同代表３人が顔を合わせて、19日に実行委員会結成ですよね。これは来てくれる人や呼びかけ人を増やさなければならんと思って、知り合いに声をかけた。３人が実行委員になってくれました。

N 法的な問題をしっかりしておかなくちゃということで、弁護士さんに声をかけたり、救急体制づくりのためにお医者さんや元養護教員の人とかに声をかけました。こういう人が関わっている実行委員会ならと安心してもらうための顔づくりですね。後は実際に動いてくれる人とお金のこと。札幌の運動の人脈がさまざまな側面から支えてくれましたね。

M ６月９日の回答で危機感を感じて、キャンプが無理だとしたら、外国人などが泊まるところを確保しなければと、呼びかけ人などに話を持ちかけて、教会の施設やアパートを提供してくれる話があったんですよね。あの時点で札幌市と共同設置できなくても、主体的に最低限の状況をつくれた。これまでの人脈がなければできなかったかなという気はしますね。

H これまでのスタイルとはちょっと違う動き方や組織体制についてはどうですか。

M 運動のやり方については、最初はとまどいがありました。本来なら共同代表も事務局長も要らないということで進んできて、誰が中心になってどうやってやるんだろう、組織として動いているのかどうかよく分からない、どうなるんだろうと思っていました。市との交渉の過程と運営会議に報告する中で、だんだんそれぞれの意識がひと

つにまとまっていった、その中に僕も入っていたなと思う。「合意形成」という言葉、みんなの意見がだんだんまとまっていって動き始める、自分もそのなかに入って体験できたのがすばらしいことだったと思います。

H 一言で言えば、新しいやり方と従来型の組織の融合ということでしょうか。脱中心とかネットワーク型のやりたい人がやりたいことをやる組織形態って、責任の所在がはっきりしなくなる恐れがあるんですよね。対外的な交渉や関係には、これでは信用してもらえない。で、共同代表とか事務局長とかを置いたけど、情報共有とコミュニケーションを大事にしてやってきましたよね。

N 次の世代と一緒に行動をすることができたのが、すごくよかった。知り合いの子や孫がいたりして、その人たちが「お母さんたちがやってきた意味が分かった」と言ってくれたのね。

市民カンパに支えられたキャンプ

M 金のことは心配でしたね。なんとかしなきゃならない、金の問題は若い人たちには任せておけないなと思いましたね。呼びかけ人にお願いしたら、平均して五千円出してくれた。比較的大口のカンパを集めてなんとかしなきゃいかんなと。最初に予定していたファンドがダメそうだという話になったでしょう。

H ファンドは取れるという話だったし、これは私たちのキャンプというよりも、あなたたちのキャンプ、若い人たちのキャンプだとはじめは思っていたから、お金の心配までする気はなかったんですけどね。

N カンパを集めにあちこちを回ったことで、このキャンプはあやしくない、市民が動いている活動なんだ、ということが見えやすくなったというプラスの側面もありましたよね。

M これまでの運動やまったく新しい人脈をフルに生かして意識的に資金集めをしましたからね。これで最終的にキャンプが赤字を出さずに済んだなあと思います。ピースウォークの前夜に、明日のピースウォークでなんとか少しでもお金を集めようと呼びかけて、若い人も一緒になってカンパ・チームを組んで出かけたでしょう。そういう勢いをつくって財政問題に取り組んだのは中高年パワーの一つだったんじゃないかなという気はしています。

H その危機感をみんなが共有してくれた。「稼ぎ頭のドリンク」だとか、やっぱり全員が一緒になって何とかキャンプの赤字を回避しようということが共有されましたよね。

M 僕はきわめて積極的にビールやワインを飲みました。（笑）

N 最後の運営会議で、キャンプの何たるかがストンと落ちたということと、資金問題についても主体性を持てたということでしょうね。1口500円で市民に広く呼びかける、市議会ロビーイングなど、若い人たちがすごくがんばった。私たちもよくつきあったと思うけど。

H 運動経験のない若い人たちが身近なところからカンパをもらってきてくれたのもうれしかったですね。

ちょっと心残りだったこと

M 残念だったのは、実行委員会のエネルギーの大半が札幌市との交渉に費やされたことですね。もっと時間があったら、もっと広げられたと思うし、また少し違うものができたかもしれないなあ。

N 今考えると、他の3ヶ所のキャンプ（豊浦、壮瞥、伊達）と共同で取り組んでもよかったんじゃないか、という気がする。キャンプだけじゃなくて、市民メディアセンターや市民フォーラム北海道、G8を問う会とももうちょっと連携を検討できなかったかなと思うんですよね。

H 連携については、私もまったく同感。私たちのほうも連携の努力に向ける時間がなかったけど、最も幅広く結集している市民フォーラム北海道が連携を呼びかけるなど要になってくれたらよかったなと思います。それとインフォセンターとキャンプの両方を準備するのはたいへんだった。最初から2つをセットのように考えていたけど、インフォセンターは他団体との共同設置を考えてもよかったんじゃない。

M キャンプに行ってすぐパペットづくりWSに参加したんですが、明らかに自分の意志をG8に向けて表明するために集まっているんですね。ピースウォークは、パペットやサウンドデモがあったりして、カーニバルのようで。こういうデモを初めて体験したんですよ。思いをそれぞれ自由に表現する場を経験して、僕自身も学びました。年齢を超えて、実に有意義な楽しい行動でした。

N キャンプはそういう自分の表現を準備する場でもあるんですよね。

H 札幌のメンバーがそういう部分にももっと関われたらよかったね。

座談会②

札幌市民運動との出会いと ストライキ＝ヴァカンスとしてのキャンプ

東京組（仲田・栗原・菰田）

札幌実行委員会発足まで

仲田 それでは、札幌実に事務局として関わった東京在住の三人の座談会をはじめたいと思います。栗原さんと私は昨年のドイツ反G8運動に参加したわけですが、日本に帰ってきて、今回の洞爺湖サミット対抗運動に「スケジュール闘争」以上の画期的な意味があるとしたら、ひとつはキャンプだろうということは話してましたよね。「G8を問う連絡会」の事務局としての活動をすればするほど、その思いは強くなった。ただ、それを自分たちが中心になってつくるとは思ってませんでした。そもそも僕らはインドア派で、通常のキャンプすらやったことないからね。

栗原 市民フォーラム北海道やNGOフォーラム、東京にもキャンプをやりたいという人がいっぱいいるだろうと思っていたけど、少なかったね。

仲田 インフォセンターについては、市民フォーラム北海道、NGOフォーラム、G8を問う連絡会の三者で持とうと提案していたのだけど、最終的には受け入れてもらえなかった。

栗原 一緒にやれればよかったとは思うけど、今から思えば、かれらにとってインフォセンターやキャンプって必要ないんだよね。自分たちの取り組みに来る海外の人は、以前から付き合いのある団体派遣のメンバーだけで、知らない人と接する必要はないと思っていたわけだから。だけどそれなら、わざわざ北海道に集まる意味がないよね。はじめから話す議題も答えも決まっているのだから。

仲田 海外から来る人を「お客様」扱いせずに、とにかく有象無象が集まって生活できる空間をつくる。このことの意義について、ドイツを経験している僕らにはリアリティがあった。そういうリアリティがないにも関わらず、受け入れた札幌実行委の人たちはすごいと思うよね。市民フォーラム北海道の中には、北海道の運動体が下働きさせられるのには我慢できないと一貫して言っていた人もいたけど……

栗原 キャンプってやっていることはインフラ整備なんだけど、下働きさせられたと思っている人っていないんじゃないか。ただ、北海道ではいろんな取り組みがあったし、人によっては本当に下働きだと思っていたと思う。たとえば大きなフォーラムでは、お客様を招くために、ホテルをとったり会場をとったり通訳を用意したりしていたわけだし。それだと下働きだと思っちゃうよね。キャンプだったら、通訳はその場で見つけるし、勝手にやってもらう。自発的な関係がつくれる。お客様をもてなすサービスとはぜんぜん違う。

仲田 また、そもそも得体の知れない国内外の人たちが集まって生活できるような空間としてキャンプをつくることが、他の多くの運動体からは危険視されました。

栗原 身近なはずの反グロ運動の年長者から危険視されたのがショックでした。

仲田 おまえはセクトが来たら仕切れるのかとか恫喝されたりして、本当にいい思い出です（笑）。で、僕らが札

幌に通ってキャンプやりましょうよと本気で働きかけはじめたのは三月からでした。この頃になってようやく自分たちでつくらないと札幌にキャンプはできないと自覚したわけです。最初に乗ってくれた年長者は七尾さんだったのですが、サミットが終わってからその理由を聞いたら、別にキャンプに画期的な意義を感じたわけじゃなくて、とにかく若者が困ってるから助けてあげようと思った、ということなんですよね。

栗原 すごいよね。

札幌実行委員会の「愛」

仲田 東京組の三人はいずれも社会運動経験があまりなかったわけですが、とくに菰田君はネットも引かれていない自宅で、授業にも出ず、引きこもりに近いような生活を送ってたわけだよね。いきなり四月から札幌に住んでキャンプづくりをしたわけですが、いかがでしたか？

菰田 一言で言えば、札幌実行委には愛があったと思います。それって社会運動に限らず、すべての活動の根幹だと思います。情動の連帯と言い換えてもいいのかもしれませんが。お互いにいろいろ仕事があってすごく忙しいのになぜか後になって考えてみるとすごく楽しかった。みんなが自発的に動いていたってことが何か新しいものを生産していた。愛があるから協働ができ、あるいは協働から愛が生まれる。そういうのって引きこもってばっかりじゃわかりませんよね。

栗原 会議の持ち方にしても札幌実では嘘がなかったよね。東京では、いちど会議で決めたことが次の会議になるとそんな話は聞いたことがないとか、そういう経験を結構したけど、札幌実ではそれがなかった。

仲田 ドイツに行った前後に、僕と栗原さんはデヴィッド・グレーバーというアナーキスト人類学者の著作の翻訳作業をしていました。その本で、反グロ運動の現場というのは会社や警察や学校とは全く違う関係性が築かれる場で、そこで人びとは解放を経験して、人間の可能性についての認識を劇的に変えるんだというエピソードがあるんですよね。だから僕は、実際にそれができるかどうかは別として、みんなはそれを試みようとしているのだろうと素直に思っていた。全然違いましたね。

栗原 会議のつくり方については、未熟な部分もたくさんあったし、人間関係をうまくつくれなかったというのはある。ただ、嘘はよくないよね。札幌実で嘘をつく年長者がいなかったのはすごいと思った。グレーバーは運動における会議の合意形成は、他者を信じることを前提とすると言っている。それがアナーキズムの理念を実践することでもあると。もちろん、札幌実の人たちはアナーキストではないし、実行委の形式もアナーキズム的だったとは思わない。ただ、たとえば東京の連絡会が、トップダウンでない組織を意識していたのにもかかわらず、基本的な他者への信頼がなかったために、内部に憎悪ばかりが生まれてしまったのに対して、そういう形式をとらない札幌実のほうが、逆にグレーバー的な合意形成を実践していたと思う。全員が意見を出してものごとを決めるという風になっていたし。札幌実では事務局だけで決めたことも多くて、会議ではその確認を得ていくだけの時も多かったと思うのだけど、問題関心を全員で共有することはできていたように思う。

菰田 それは、私たちも実行委のメンバーを信頼していたし、逆に信頼されていたからこそできたことではないのでしょうか。非常にありがたいですよね。

仲田 あと、東京の連絡会の一部では菰田君の社交性の低さや、実務をこなすための「運動スキル」の低さが批判の対象にすらなったのですが、札幌実では全くそういうことがなかったですね。いろいろできないのは当たり前なんだから、若者は育てて運動にオルグしようという土壌がありました。かといってその若者を特定の団体に囲い込もうとするわけでもない。札幌実が発足したばかりの頃、菰田君が事務局の中に「事務局長」をつくることに強硬に反対したことがあったのですが、あれよかったよね。

栗原 対外的にも事務局長はつくろうかと決めた事務局会議があって、菰田君が自転車で帰ったあと、他のメンバーとミスドでお茶をしながら「コモちゃんってあまりしゃべらないけど、大丈夫かしら？」って心配してたんだよね。そしたら菰田君から、言い出せなかったけど私は事務局長をつくることには反対です、というメールが届いて、意見が出てよかったねとなった。

仲田 そんなやさしい空間は東京にはないからね。

札幌市との交渉破綻について

仲田 札幌市との交渉はつらかった。

栗原 交渉自体は成果がなかったよね。ただ、交渉のために呼びかけ人に名前を連ねてもらったり、「国際交流」という名称を使ったりしたことが、結果的に実行委を大きくすることにつながったと思う。

仲田 場所が当別町になってしまったことは、個人的には非常に残念だった。札幌で宿を取る人と、当別町でキャンプをする人とで、運動を割ってしまうことになったと思っていました。そんなキャンプはない方がいいんじゃないかとも思った。

栗原 当別が見つからなかったら、僕らの意志に関わらず、スクワットは起こってたね。そして一番の象徴行動になったと思う。覚悟はしていたけど、実際に起こっていたら、実行委としての関わり方は本当に難しかったと思う。当時、このことについて議論をする時はすごく緊張してたよね。

仲田 実際にスクワットが発生したら、排除をめぐって札幌市と本当の意味での勝負になるし、サミットが終わってからも長くかかるかもなと思っていました。

「喜びのストライキ」

仲田 話変わるけど、菰田君ってなんでキャンプやろうと思ったの？大学の単位も落とすだろうし、お金がもらえるわけでもないのに。

菰田 最初のうちは新自由主義の問題とかもあんまり考えていなかったんですよね。ただ、早稲田で昨秋にやったDissent! のインフォツアーは見に行って、デモは楽しそうだなと思ったのはあります。あと海外からの札付きのワル共が大挙してキャンプを張っているという絵を想像して燃えました。漠然とアナーキズムは好きだったので。でも今になって振り返れば振り返るほど、何で「先遣隊」として移住までしたのか、自分でもわからなくなる。ただ僕って普段はすごく腰が重いのに、突然ものすごくフットワークが軽くなることがあるんですよね。で、今回はその期間が長かった、と。

仲田 まあ私と栗原さんもG８の問題点とかよく分からずにドイツに行きましたしね。キャンプについても、四月くらいから、宣伝のために文章を書いたり、説明会をやらなくちゃいけなくって、そこではじめて意義について真剣に考えたっていうのが本当のところですよね。

栗原 ただ、文章を書いてみると、別に話し合ったわけじゃないのに、僕も仲田君も同じことを言っている。調べると、海外の活動家も同じようなことを言っている。とにかくのんびりしていたというのがドイツでのキャンプの印象です。働く人は働くし、働きたくない人は働かなければいい。キャンプの理念について、僕らはオルタナティブ・ビレッジっていう言葉を使っていたんだけど、要するにヴァカンスを作りだすことなんだよね。白石嘉治さんは、ヴァカンスについてこんなことを言っています。

「ヴァカンスのきっかけとなったのが、１９３６年フランスでおきた「喜びのストライキ」です。極左のトロツキストは「全ては可能だ」と言っていましたが、そういう活動家の言うことすら聞かなかった。お祭りお祭りで、社会党共産党政権はもちろん、トロツキストですらコントロールがつかない状況です。そしてゼネストがどんどん広がっていく。それを何とかなだめるために、分かった、もう分かったから、と言って始まったのがヴァカンスです。運動は出来事だし、それはつねにヴァカンス的なものをめざす。ストライキとヴァカンス、この往還が歴史をつくるといってもいい」。

ヴァカンスとしてのキャンプ。それは「喜びのストライキ」であり、歴史をつくるんです。

菰田 札幌実には、七尾さんとか、細谷さんとか、愛がありました。義理人情が大切だとも思いました。札幌に行く前は、僕は個人主義的なところが強かった。今でも個人主義者で引きこもってますが、個人主義の意味が変わったというか。根幹には他者への信頼がある。それが身をもってわかった。

栗原 ヴァカンスは、出会いの場だからね（笑）。僕は、菰田君が「喜びのストライキ」で生まれるヴァカンス状態を体現していたと思います。

菰田 僕とグンジーだとおもう。

栗原 昼間はサッカーやって、朝まで飲んで騒いでいるわけだからね。いや、それにしても菰田君がすごいと思ったのは、キャンプ期間中、一日20時間くらい寝てたことだよね。

仲田 起きだしてきたと思ったら、ビール飲んで、フードと入場料カンパのお金を数えて、いくらぐらい赤字がでそうだとか伝えてまた眠る。

栗原 仕事はきっちりこなしてるんだよね。

仲田 最後に、札幌実を支えた「市民運動」の力について確認したいと思います。札幌実には本当に多様な団体・個人が、さまざまな形で参加してくれました。これはこれまで北海道で運動を続けてきた中高年ズの蓄積の上に成立したことで、僕たちは文字通り、何もできなかった。

■はじまった

　キャンプ／インフォセンターが動き始めた。札幌実行委員会が設立されたのだ。五月一九日のことだ。エルプラザの一室が満室になった、わけではない。二〇人もいなかったのではなかったか。が、知らない顔の若い人が多い。知った人もいる。が、こういう場ではまず会うことがないような人たちだ。実行委員になってくれた人や呼びかけ人になってくれた中高年の人たちだ。

　事務局から今後どのように進められていくのかが説明される。

　そもそも、この会の姿勢ですが、ときりだしたのはウタリ協会の石井ポンペさんだ。自分の立場からすると、反G8を前面に出すのは困る。「反」じゃなく、国際交流キャンプをやってほしい。アイヌ民族が日本の先住民族であるかどうかが国会で審議されている真っ最中だった。歴史的に重大な決議を前にして、シリアスな状況にあった。実行委員会としては、「反」を前面にしないことを確認した。それから二週間あまりして、「アイヌ民族は日本の先住民族」との国会決議が全会一致で通過した。

　こういうことを実行するには、カネがかかる。カンパを集める方法を考えてほしい、と提案する人がいる。この会の趣旨と領収書用紙があれば、だれでも集めることができる。彼自身、多額のカンパをしてくれたし、七月五日の集会にもきてくれた。この日のピースウオークで逮捕者がでたと知るや、翌日の抗議集会にも、別の呼びかけ人とともに駆けつけてくれた。

　若い実行委員の中には、世界中からやってくるのなら、激しいデモとか暴動になりはしないか、などと心配する人もいた。が、ほとんどの人は楽観的だ。

■裏方の実行委員

　地味に関わった人たちもいる。

　キャンプには参加しなかったが、当初から積極的な意見を述べ、資金繰りにも多大な協力をしてくれた人がいる。彼女は、キャンプ場で使う、一度に大量のコーヒーが落とせるネルの袋を縫ってくれた。

　就職活動中の学生スガワラくんもがんばった。実行委員をたのまれて断りきれなかったようだ。自分の大学でキャンプのビラをまいた。これも、依頼された教師の手前、断りきれなかった。

　それにしても、キャンプでは「反G8ワールド・カップ」のサッカー大会があると知るや、彼は色めきたった。「ぼくはサッカーの係をやります」と宣言した。

　キャンプ期間中、彼はサッカーに没頭した、だけではない。フードの手伝いもした。が、彼の基本はサッカーだった。ミノブサンがこの分野の表のリーダーなら、彼はプレーの中心人物だった。本番前の二時間、体力温存のために昼寝をしていたほどだ。国際試合では彼が得点王だった。

　国内外から続々とキャンパーたちが集まってくる。当別駅まで迎えにいく。四日の担当は森山だ。運転は酒をのまない中山さん。改札口からバスまで案内する。途中からドリンクの小池さんや数日前に実行委に加わった人も案内者になる。バス利用者からカンパを集めるのは、埼玉県から夕方に到着したばかりの女性だ。みんな国際交流キャンプの主人公になる。

　救護班スタッフとして活躍した旧擁護教員の人たちは、そこらにいる明るくおしゃべりなおばさんたちのようだ。「なるべく、わたしたちに救護の仕事がないのがいいのよね」、といいながらフードを手伝う。だれにでも、ガラガラっとしゃべり、あけすけに応対する。実に庶民的だ。オーストラリア青年を前に食事をしていたときなど、感動的ですらあった。ほとんど英語になっていない言葉で、ゲラゲラ笑いながら話しかける彼女らこそ、国際人ではないのかと思ったことだった。

■せまるキャンプ

　六月九日、札幌市がキャンプ場提供についての交渉をいったん打ち切った

かかわった人

ときのことだ。キャンプまで一か月をきっていた。行政との協働でなくても、キャンプや国際交流ができる道を実行委は模索した。定山渓にあるラグビー場や市郊外の大学グランドなどが候補となった。が、いずれも条件が合わず、キャンセルになった。事情がどうあろうとも、国内外からのキャンパーはやってくる。彼らが勝手に市内のあちこちでテント生活をはじめるとすれば、手入れがはいる。

　呼びかけ人の阿部ユポさんが宿泊所を提供するといってくれた。北海道ウタリ協会副理事長の彼は、協会生活館の中にも泊まれるし、周囲にテントを張ることもできる。小金湯温泉にある民族関連施設のチセ（アイヌ民族の伝統的な家）を宿泊だけなら使える。

　美唄カトリック教会のマンフレッド神父さんは札幌にある教会施設が使えるという。すでにそこはニュージーランドのマオリの人たちが使用することになっているが、地下室が空いている。それに自分が管理するアパートの空室もあるという。阿部さんも同じようなことをいってくれた。

　ともかくこれで六〇人前後は宿泊できる。

　結局、これらの施設は使うことなくすんだのだが、キャンプと足並みをそろえて運動している市民メディアの人たちに利用してもらうことになった。

　札幌市との交渉がもつれて、キャンプの場所が決まらない。早くポスターなどを作って宣伝をしなければならない。が、場所が……。

　見切り発車で、実行委の山口さんが知り合いのデザイナーに図案を依頼する。ひと月前から彼女が無料でお願いしていたのだ。が、場所のことだけでなく、ポスターのコンセプト自体がかたまっていなかった。大急ぎで制作してもらった図案に訂正が要求された。でも、デザイナーの先生は快く応じてくれた。

　結果的に、すばらしいポスターが完成した。けど、実行委と先生のあいだにいた山口さんはハラハラだった。それにくらべ、事務局の主要メンバーらはポスターをよそに卓球に興じていた。そこがまたいいところなのだが、ともかくここにも支えてくれた人がいた。映画の井筒監督に似たチョイ悪な感じの人だそうだ。

■明るくあかるく

　事務局主要メンバーの卓球にちなんで、もうひとつのエピソードがある。東京から参加している彼らなしには、このキャンプもありえなかった。札幌での長期滞在にもかかわらず、彼らの献身ぶりは特筆に価した。だから、いっときの卓球もやすらぎの一瞬だったにちがいない。仲間ぼめのようだが、それだけではない。

　「賛同金に支えられた財政」について、細谷さんも書いているが、財政は大変だった。いろんな人からカンパをいただいた。キャンプ参加者からのそれを含めて、すべてが賛同金でまかなわれた、といっていい。

　が、その前に運転資金が必要だった。このキャンプの意義を理解してくれて、多額の貸付金を用意してくれた人たちがいた。

　銀行から下ろされた高額の札束がきわめて慎重に事務局に届けられた。はじめ緊張してそれを受け取った彼らはやがてこともなげに、卓球に夢中になった。

　さまざまな人の関わりや支えなしには、キャンプは成り立たなかった。ふだん手にすることがない金額だったり、緊張やプレッシャーの連続だったが、人びとのあたたかさやあかるさがキャンプを支えていた。（文責　森山）

「仲間が困っているから助ける。これは当たり前」

キャンプ実施をめぐる札幌市との交渉が決裂したのが、6月26日。その翌日、当別町で『災害防災備蓄センター』を一人で管理運営している山口幸雄さんが我々を受け入れてくれた。

ヤンジー

YOUNG-G

ー 7月1日から10日まで、こちら（旧中小屋中学校・災害防災備蓄センター）を貸していただきましたが、ヤンジーさんはその間何日間くらいこちらにいましたか？

たまたま先住民族サミットとぶつかって、そっちと行ったり来たりしていたので、ここに居たのは4日間くらいかな。何かあった場合に責任者がいないと問題になるので、本当はずっとついてるべきなんだけど、実行委員もしっかりしていたから。私自体もNPO、NGOだから、私としては皆さんも仲間内なんだ。仲間が困ってるから助ける。これは当たり前。だから、ここを使うOKを出した。そして、何ごともなく終わったのが一番いい。

ー キャンプ開催中の様子をヤンジーさんから見てどのように思われましたか？

お国柄が変わればずいぶん変わるもんだなと思った。ミーティングをするときもビール飲みながらやってるしさ。日本なら考えられない。寝そべってミーティングやったり。向こうでは当たり前かもしれないけど、日本では考えられない。でもいろんなやり方があっていいと思う。

ー 校舎にバナーがいっぱい貼ってあったのはどう思いましたか。

それはあくまでもそれぞれの人の主張だから、とやかく思わない。世界の大事なことを、お金持ちの8カ国だけで決めていいのかと。まだ他にもたくさん国があるのに。そういうことを主張したいのはいいんじゃないの。宗教、政治、思想は自由なわけだから。

ー 町役場から注意を受けたり、関係が悪くなってしまったなどのご迷惑をかけてしまったのではないかと思っているのですが

ここの施設は民間ですよ。私が、災害救援ネットワークが、運営と管理をしているの。町から助成は一切受けていない。建物は町の役場の施設だけどね。運営しているのは私個人。建物を大幅にいじるときには申請が必要だけど、ここの使用に関してはとやかく言われることはない。施設の管理運営に関して、役場が私以上にノウハウを持っているならともかく、ああだこうだって言ってくることがおかしい。

ー その後、ああだこうだ言われましたか？

言われました。言われましたけど関係ない。でもそこで「何を言ってるの！」と向かうとケンカになるから、「ああそうですか」と聞いている。ケンカする必要は無い。相手が言いたいことを聞いていればいい。「ああそうですか、ああそうですね」と。「施設の管理運営に関してもう少し細部に渡って取決めしたい」と言われているが、忙しいから行っていない。そんなことよりも、他に大事なこと、やらなければならないことがたくさんある。役場もわたしも。

ー キャンプを受け入れたことで、近所の評判とか、迷惑がかかったとか変化はありますか？

あのあと、町内の会長さんたちが来ました。何事もなく終わったのでホッとしていたようだった。ただ、何をどのようにやっているかが、わからないので、戦々恐々と見ていたみたい。中小屋駅で外国人の人がたくさん乗り降りしたり、長距離を歩いていた人もいたでしょ。外国人をたくさん見たことが無いから、驚いて見ていたんだろう。でも、私がやっていることで、今までも、近所に大きな迷惑はかけていない。夜中じゅう外で騒いでいたことがあって苦情をもらったことはあったけど。今回のキャンプのイベントは体育館の中で主にやっていたから、騒音ということもなかった。ただ、異様な雰囲気というのかな、普段来ている人ではない人がたくさん来ているから。興味もあったんじゃないかな。

ー「不夜城みたいに電気がついている」とヤンジーさんにも言われましたが、ご近所さんからもそういう指摘がありましたか？

言われていない。「電気がついていたねー」とは言われた。遠くから見えるから。人がわさわさ動いているのもわかるしね。でもそんな特別危ないことをやっているわけでもないし、隣近所に迷惑かけることもやってないしね。ここの学校には年間1000人来るんだから。その中の一つだよ。

ー キャンプを受け入れて、ヤンジーさん自身に変化はありましたか？

別に無いけどね。とにかく6月7月は忙しかった。イベントがぶつかっていたから。6月はアプカシで、宗谷岬から600キロ歩いた。終わったらすぐに、7月1日から3日まで先住民族サミットがあった。二風谷で1250食の食事を出した。そして4日から会場がコンベンションセンター（オルタナティブサミット）に移った。ここのキャンプは3日から始まったから、夜中に抜け出して見に来た。その後はずっとここにいて、5日に函館でアイヌのシャクシャインのイベントがあったけど、そちらに行くのは中止して、ここを見ていた。でもそれは全然問題ない。これからまた、こういう問題が起きたら、たぶん受入れするでしょう。外国人だからとか、アイヌだからとか、わたし自身にそういう観念がないの。みんな地球市民、地球の家族だと。そんなの当たり前のことだ。

ー ヤンジーから僕らに対してご意見があったら。

もうちょっと受入れの態勢というかな、やり方を工夫したほうがいい。例えば食事を作るときに、一人だけに負担がかかるようなやり方はいけない。そういうことはみんなで手分けしてやったほうがいい。それから、後の片づけをぴしっとやってほしい。後から「あれがない、これがない」と出てくるのは困るから、各自責任持ってもらわないと。でももう大人なんだから、一から十まで言うことじゃない。小さい子どもだったら言うけどね。大人なんだから自分たちでわかるでしょ。

あと、東京の学生さんたちが実行委員として来ていたのは、なかなかすごいなと思った。わざわざ東京から来て一生懸命やっていた。通常は地元の人がやるでしょ。地元の人もいたけどさ。そしていろいろ通訳したりだとか。やっぱりそういうことがないと伝わらないでしょ。ドイツ、フランス、とかたくさんの外国人と一緒にやるからには。

ー 後片付けがまずかった…。

まずかったというわけじゃないけど、とにかく貸したときの状態で返していただくというのが前提でしょ。何か物が残っているというのは貸した状態ではない。結局は私が片付けしなくちゃいけなくなるから私に負担をかけるということでしょ。先日、ボーイスカウトの人がここに来ていたけど、全部、トイレ掃除まできちんとしていったよ。そしたらお互いに気持ちがいい。まあ、でも、それくらいは。いいほうだったよ。

ー ゴミをたくさん出してしまった…。

まあ、それは、たくさん人が来たからゴミは出るもんだ。ただ、処理も日にちが決まっているのだから、そういう日に来てもらって出すようにしないと、俺がやることになるからね。

（まとめ：本多）

活動報告

札幌実行委員会は最初から具体的活動内容が明確に決まっていたわけではない。

事務局以外の実行委員というのは、地元札幌や近隣の市民で、たまたま事務局メンバーのうちの誰かと何らかの知り合い関係にあったために、「ちょっと手伝ってよ」的に実行委員会に参加することになってしまった〝お人よし〟たちである。こう表現するとなんだか他人任せで真剣味の薄いヒトたちが集まったように思われそうだが、確かにきっかけはそうであっても、いったん会議に参加してしまうと、自然とこの組織にハマることになった。この組織は誰もが入りやすい空気を持っていた。その結果、立場や意識のレベルがかなり違うものたちが集まることになったが、皆キャンプ実現に向けてそれぞれ自分に出来ることを考え、真剣に意見を交わし、準備に取り組む姿勢を示した。

外国から人がいっぱいくるんだって、

キャンプをつくろう

なんかわかんないけどそれおもしろそう

どんなキャンプがいい？

わたしにできることあるかな

何が必要？

どんなキャンプであろうと快適でかつ安全でなくてはならない。まずはどんな準備が可能か考え、それを具体的にするためのコレクティブを作った。

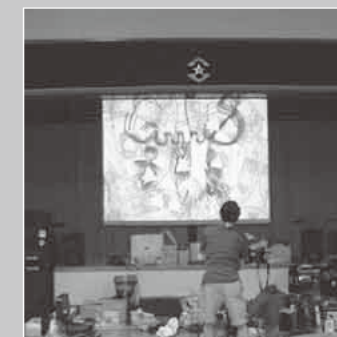
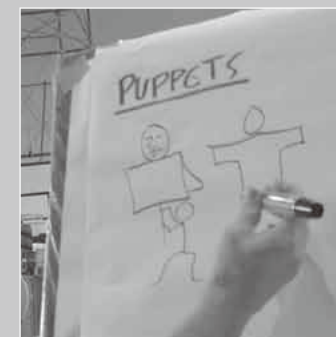
フード、ドリンク、セイファースペース、エコ、救急、リーガル、ワークショップ。それとインフォセンター。

フードとドリンクとエコにはそれぞれ専任のメンバーが若干名いたが、残るほかのコレクティブには予め準備できるような専任メンバーはいなかった。実行委員の絶対的な人数が不足していたためである。でもそのことはかえって全員でそれらコレクティブの必要性を常に意識しつつ各々の活動をおこなう結果につながったとも言える。

そして実行委員会設立から2ヶ月足らずで、『わたしたちの村』を実現させた。

ここからはその各活動の様子を紹介したい。

オルタナティブな会議の進め方

多数決ではなく全員の合意形成

合意形成に使われるハンドシグナル

会議は、誰もが意見表明・意思表示しやすい形「合意形成」を根本に行われた（必ずしも全員の感想ではないが）。進行役（ファシリテーター）が会議を導いた。進行役というのは、議題を挙げ、一人ひとりの発言を引き出し、発言の復唱と整理をして、会議を進行していく人だ。自らはあまり発言せず、進行役に徹する。

『もともと人々が自発的に集まり、何かをしようとするとき、集団での意思決定を合意形成により行うことが多い。その主な理由。

①合意形成は人々が集まって何かをするときにもっとも簡単な方法であることが多い。

②合意形成の方法がうまく働くと、グループは成員それぞれの専門技術、知恵、エネルギーを生かすことができる。

③合意形成は包摂と協力を育てる方法であるため、人々の物事への参加をより強力なものにする。

「その成員の多くが望むものは何か」を明らかにする方が、「ある決定に従わない人たちをどのように説得するか」を考えるよりずっと易しいということだ。』

引用：『合意形成、その促進そして解放』ロックタブコレクティブプロジェクト　翻訳：poetry in the kitchen 翻訳部

全員の意見を出し合い、とにかく時間をかけてとことん討議する。話し合っているうちに色々なアイデアも生まれるし、お互いの理解も進む。考えが多少変わることもある。

キャンプ内での全体会議

キャンプにおける情報共有・意思決定のための会議は、「全体会議」、その結果を踏まえての「スタッフ会議」と、2つの会議が予定されていた。

しかし、準備期間から問題が露呈した。

「カンパ問題（キャンプの財政が厳しいため、積極的に手伝ってくれる参加者からもカンパを集める必要があった。一部参加者は最初のうちは「カンパとか言いながら、強制的に入場料を取るのか？」と納得してくれなかった。↓会議の結果、少しでも多く出せる人が出してくれるようになった。）」、「部屋割り問題（校舎内で泊まる人の部屋割りが男／女となっていた。ある参加者が男／女の張り紙を剥がして、「《もう一つの世界》とか言いながら、これでは資本主義社会が作っている既存のジェンダー関係を再生産しているだけだ。こんなところにはいられない、帰る！」と怒った。↓会議の結果、女専用／男女だれでも／セイファー・スペースとなった。）」。

我々は自分たちのキャンプ、政治をこの場で作るという試みをしているのだから、参加者全員で問題点など情報共有して意思決定していくべきだという話になり、会議は全体会議に一本化された。

実際にキャンプが始まったら、会議慣れした外国人と日本人が一人づつ出て、会議を進行していた。全体で情報共有をし、問題点を出すなど話し合った結果、「お客さん」はいなくなり、思った以上にうまくキャンプを作っていくことができるようになっていった。

（文責：後木）

行政が目論んだ「緊急」「避難」「特設」キャンプを突破してしまった夜

6月25日：運営会議メモより

その日は札幌市と交わすキャンプ設置に関する覚書（19頁資料参照）の詰めで、市側が譲らない三点を事務局が運営会議に持ち帰った。それを受けて、一人ひとりがキャンプ設置の主体的な意志を持ち、守るべきものは何かと真摯に意見を述べるのは感動的だった。キャンプの意義をより深め、自分たちに理があるとわかりあえたし、気持ちが削がれなかった。

もちろん、それまでも会議はみんなの声を出し合って進め、合意形成をていねいにしてきた。出てきた個人の意見を前向きに検討しキャンプの具体的な準備を進めていたからこそ、しぶとく過激なユーモアのこもった対案が語られた。

【札幌市の条件１】
名称は「Ｇ８サミット特設キャンプ」とする

名は体を表すから、**国際交流**をつけさせないところに交流させない意図がみえる。危なそうな人々を **緊急** に **避難**（隔離）（この前の覚書では「**緊急避難**キャンプ」だった。）させておくための **特設** キャンプ。

こんな名前ではいけない。

【札幌市の条件２】
設置主体は札幌市、運営の手伝いとして実行委員会がある

これでは、意思に反して管**理の手足** にされかねない。これも受け入れられない。

わたしたちは、キャンプ場提供が札幌市、運営は実行委員会が担うという **協働の形** で合意されていると思ったし、実際、車両、食材、病院など手配は実行委員会がしている。

指示を受けるのではなく、協議して進めたい。

【札幌市の条件３】
キャンプ場内に管理人が常駐し、巡回警備する。

キャンプ場のテントサイトを見渡せる管理棟（管理人以外は立ち入り禁止）に管理人（＝警備員）が常駐し、自由に巡回して参加者にも話しかける、というもの。

市は、あくまでもキャンプ場の保持、管理のための管理人の配置と言っているが、**警備員のいるキャンプに泊まりたい人はいない。**

「管理棟のキャンプサイトに面した **窓にバナー** を貼って見張らせないようにしよう。」

「管理棟に **警備員といっしょに常駐する** 係をつくろう。」

「警備員にはＩＤをつけてもらい、歩く時間は決めて、必ずキャンプスタッフが同行する。つまり、**警備を警備する。**」

という案も出された。

結局、国―北海道危機管理連絡会の道警、自衛隊、海上保安庁・・・という警備管理体制に組み込まれ、地方自治体の自律性を削がれた札幌市サミット支援担当部の覚書には、受け入れる余地がなく、実行委員会と札幌市の交渉は決裂した。

（文責：七尾）

セイファースペース

安全な空間が果たす役割

安全と安心をつくる …私たちの安全な場のつくり方

- □身体的、性的、精神的な暴力・虐待は一切しない。
- □境界を保つ、たとえば、相手の明確な承諾なしに体に触らない。
- □相手の領域に関することで、相手が拒否している発言や行動をしない。
- □酒類のある場では、とくに他人の安全への影響、迷惑を考慮する。
- □異なる考え方も尊重して、力や暴力での解決に走らない。文書や発言の言葉の使い方は、女性差別を含めてあらゆる差別がないか、確認する。
- □困ったときは、その場を去る自由が誰にもある。
- □「見て見ぬふり」をしない。助け舟を出す。誰かが差別や性的ハラスメントを受けているな、と感じたら、それを指摘し、表明する。

（「セイファースペース」講演会資料より）

６月７日、講演会「『セイファー・スペース（"より"安全な場所)』ってなぁに？」が開催された。

ここで話された「私たちの安全な場」という理念は、オルタナティブ・ヴィレッジとしてのキャンプの柱の一つだった。今回はスタッフが常駐できずスペースは設置できなかったが、この理念はキャンプでの日々の中にしっかり流れていた。

「セイファースペース」になってくれた人たち

宇崎里佳

「疲れたらそこで休ませてもらえるかな」などとのんきなことも考えながら参加した。が、キャンプやデモで、私が安心と落ち着きを得たのは参加者とのやり取りだった。例えば・・・

逮捕者が出たデモの後、広場に集まってきた参加者が「ピーポくん」（警視庁のマスコット）に水をかけたり、交互に蹴飛ばしはやしたてていた。その輪がどんどん大きくなる。声も…。私は「あぁ、これがＴＶで流れるのはイヤだ」と思った。八つ当たり、リンチっぽい感じも、感情を逆なでされるようでたまらなかった。「イッツァ、サッド、シチュエイション！止めようよ」と思わず割って入ってしまった。でも、リンチはやまない。すると、金髪の青年が私の目を覗き込んで「どうしたの（もちろん英語）？」と尋ねてくれた。

筆談の末、理由は伝わらなかったけれど、「ノー、プロブレム」と肩に手をおいてやさしく言ってもらい少し落ち着いてきた。帰りの車中で、キャンプスタッフに、ゆっくり話を聞いてもらえたのもうれしかった。

キャンプ終了後、私は厨房の仕事をしたのだが、勝手がわからず作業は終わらず、食器を戻しに来た人にかける声がきつくなった。恥じると「厨房に入れば気が荒くなるっていいますからね。ダイジョーブ」とにっこり返された。

人は人によって傷つくけれど、ひとに癒されるものだなあ。

フード コレクティブ

なんたって食が基本！

ある日のレシピ

DINNER

ラタトゥイユ
青大豆入りターメリックライス
オニオンスープ
豆のサラダ

LUNCH

やぎやの天然酵母パン
コリアンダースープ
押麦サラダ
香草マッシュポテト
レットビーツピクルスのマッシュポテト

LUNCH

豆ときのこの炊き込みご飯
味噌汁
わかめと大根のサラダ
白菜の新漬

BREAKFAST

野菜リゾット
青大豆とレットビーツのサラダ
南瓜の茎のおひたし
味噌ドレッシングポテトサラダ
オニオンスープ

LUNCH

ニラ味噌のお結び
わかめご飯のお結び
味噌汁
白菜の新付け

DINNER

ベジカレー 白飯
やぎやの天然酵母パン
白菜の新漬
すべりひゆの酢の物

なぜキャンプの食事はヴィーガン食なの?!

当別キャンプでは、これまでのG8キャンプでの経験を活かし、ヴィーガン食を提供しました。ヴィーガン食とは動物性の食品（卵、乳製品も含む）を一切使用せず、穀物や野菜などのみで作る料理のことです。

キャンプにおいてヴィーガン食を提供する背景は、大きな理由として、宗教的な理由と少数者の意思を尊重する、という二点があげられます。

宗教的な理由とはイスラム教徒は豚肉を食する事は禁止されており、ヒンズー教徒は牛肉、ジャイナ教徒、ユダヤ教徒など程度の差がありますがそれぞれ食事のタブーがあります。

ヴィーガンの人達の思想的な背景をキャンプに係わりがある、環境的側面とアニマルライツ（動物の権利）の側面の二点に絞って説明します。

環境的な側面として、牛肉1キロの為に穀物16キロが必要で、牛肉と米を比較した時、同じカロリーを摂る為には二十倍の水を使用しなければならないといわれます。また、2006年11月の国連食糧農業機関（FAO）報告書によると、ほとんどの環境問題への最大の寄与者は15億頭の牛であるとし、人間活動で排出される温室効果ガスの18%、酸性雨の主な原因であるアンモニアは、全家畜排出の3分の2を占め、アマゾンの70%を放牧地に替え、ブラジルの牛肉輸出はオーストラリアを追い越しました。これから中国やインド等が経済成長をし、肉の消費量が増えれば、環境の持続可能性の維持は不可能だと思われます。

動物の権利という側面では、欧米で1975年に「動物の解放」という本が出版され動物の権利運動が拡がりました。欧米にヴィーガンが多いのは、この影響が大きいのではないかと思います。ガンジーが「道徳的な進化の度合いは動物をどのように扱っているかで判断できる。私の心の内では子羊の命の貴重さは人間の命の貴重さにいささかも劣るものではない」と言いました。この言葉は動物の権利に関心のあるヴィーガンの心情を表しています。現代、肉は工場で生産されており、牛や豚は工場で過酷な生を生きています。その状況を放置したままの平和はあり得ないと、ヴィーガンは考えています。

ヴィーガンの人は日本ではもちろん、キャンプの中でも少数でした。でも、キャンプの食事をヴィーガン食にしたのは少数の意見の尊重、多数の意見が必ずしも正しいわけでもなく、少数の意見が間違っているわけでもない、という考えに、肯定的な雰囲気があったからだと思います。

これからのキャンプでもおいしいヴィーガン食がたべられることでしょう。

華麗なる食材たち

提供していただいた生産者さま、調達に関わっていただいた皆さまに感謝申し上げます。

- ◆たまねぎ…鹿児島産有機
- ◆人参…関東減農薬
- ◆大根…積丹産有機
- ◆にんにく…鹿児島有機
- ◆生姜…高知産減農薬
- ◆じゃがいも…長沼メノビレッジ　有機　雪室貯蔵
- ◆白菜…はるきちオーガニックファーム　有機
- ◆南瓜の葉…はるきちオーガニックファーム　有機
- ◆ズッキーニ…はるきちオーガニックファーム　有機
- ◆すべりひゆ…はるきちオーガニックファームの雑草とされているもの
- ◆米…北海道幕別産　他現地にてカンパ有り
- ◆大豆…はるきちオーガニックファーム　有機
- ◆フルーツ類…現地にてカンパ
- ◆味噌…地元産原料音威子府味噌
- ◆だし昆布…北海道産三石産
- ◆干し椎茸…大分県産
- ◆菜種サラダ油…非遺伝子組み換え菜種油
- ◆純米酢…京都村山造酢千鳥酢
- ◆塩…やぎやさんよりカンパ
- ◆スパイス類…ちひろさんよりカンパ
- ◆押し麦…国内産
- ◆りんごジャム…山形県産りんご
- ◆醤油…道産丸大豆１００%
- ◆みりん…味の一醸造株式会社　味の母
- ◆酒…白河銘醸　純米酒規格外
- ◆ホールトマト…イタリア産
- ◆小麦粉…北海道産ホクシン小麦
- ◆麦茶…国産

お世話になった農家さん、なんたって野菜がうまい！

長沼町 メノビレッジ長沼

七月初めのキャンプで北海道の食材を使いたいと思ったものの、その頃にオーガニックで、ある程度（2千食を試算）の野菜、特に根野菜を用意することはなかなか難しいと言われていたので、メノビレッジに雪室貯蔵のじゃが芋があった事はとても幸運でした。

雪椌から6月に出したばかりのメノビレッジのじゃがいもは雪の力でじっくり糖度が上がって甘くてホクホクになって美味しかったのでした。

5月末に訪ねた時に 建築中だったパン工房が 七月に完成したら 数日仕事を休んで キャンプにだすパンを提供しても構わないともいっていただけました。実現はしなかったものの気持ちがとっても嬉しかったです。

現在メノビレッジでは パン工房が完成して 予約制で パンを販売してます。

雪椌に一緒に保存されていたレッドビーツ はりんご酢につけて、キャンプで提供されました。

石狩市 はるきちオーガニックファーム

はるきちくんは 石狩で有機農業をしている、料理上手なステキな青年です。

はるきちオーガニックファームの畑は、当別キャンプに行く途中なので、何度か畑に野菜を買いにいきました。当別は平坦な土地なのでなぜかいつも道に迷いました。

白菜やズッキーニも美味しかったけれど面白い食材としては 南瓜の茎やお花も提供してもらいました。

ちょっとしか手伝えなかったけれど南瓜畑に生えているスベリヒユという雑草をみんなで引き抜きました。茹でると、ヌルヌルします。酢醤油であえました。

はるきちくんの畑ではウーフやお手伝いを募集しています。興味がある方、時間や力がある方はぜひ行ってみて欲しいです。

スベリヒユ

スベリヒユ科

分布 全国

生育地 畑、荒地、路ばた、川原

食用部 根をとりのぞき全草

採取時期～ 初夏～秋

ヌルヌルしているから、スベリヒユ

Let's try! 簡単！お手軽!! ヴィーガンレシピ

今日からあなたもベジタリアン♪

有機野菜のラタトゥイユ

1. 玉ねぎ一個をくし切りにする。
2. 鍋に油をひいて、玉ねぎを蒸し煮する。
3. 水分がでたら、強火で煮詰め、さらに蒸し煮する。
4. 二回から三回繰り返して、人参、大根、じゃがいも、ズッキーニ（一口大に切る）などを固いものから順に入れて、かき混ぜながら炒めて火を通していく。
5. 塩コショウで味をつけてお好みでクミンなどのスパイスをいれても美味しいです。

押し麦サラダ

1. 酢に塩、コショウで味付けし、同量のオイルとともにかくはんしてドレッシングを作ります。
2. 玉ねぎ、人参、きゅうりなどを角切りにし、半量のドレッシングに混ぜておきます。
3. 押し麦は、水で洗い、塩ひとつまみ加えて倍量の水で炊きます。
4. 水気を切り、熱いうちに残りのドレッシングで味付けしておきます。
5. 冷蔵庫で冷やし、ドレッシングに混ぜた野菜と混ぜ合わせ、レタスを添えてどうぞ。大豆やひよこ豆を入れても美味しいですよ。

ベジカレー（ベジタリアンカレー）

1. 油でにんにく８ｇ、しょうが８ｇ、玉ねぎ２５０ｇ、ひたすら炒めます。
2. 水が出て、さらに水分がなくなってペースト状になったところで、カレー粉１０ｇくらい（他お好みのスパイス）をいれて、ルー状にします。
3. 玉ねぎ（色々な野菜を入れても良い）２５０ｇをすりおろして加えます。基本的に野菜の水分だけで煮込みますが、足りなければベジタブルストックを加えて、トマト８０ｇくらい加え、昆布、乾し椎茸を加え、1時間くらい煮込みます。
4. 煮込んだら塩、醤油を入れて味を調えます。甘みがたりなければチャツネ（または果物のジャム）、コクがなければ味噌を加えて調整する。お好みでズッキーニや人参、ジャガイモなどの具を炒めて最後に入れて、完成。白米やターメリッククライス、パンと一緒にどうぞ。

戦いすんで日が暮れて行商しましたG８

ヤスオカアケミ

当初2千食のビーガン食を作ると聞いて手伝いで入りました。

最終日には、予測していた人数を大幅に下回ったため食材が残ってしまいました。

こだわりの美味しい食材、一粒たりとも無駄にしたく無かったので、Ｇ８食材行商ボランティアをしました。結果、石狩当別組、洞爺組分ふくめ、自分が買取ろうとしていた米や野菜まで、手元に残る事なく完売御礼！

車に米や野菜を積んだ行商や最終日にはフェアトレード雑貨店「みんたる」にて丁度、東京のフードバンクの講演会があり、テーマとピッタリ！と、店頭にて量り売りさせてもらい楽しく行商しました。

これでフードコレクティブの任務終了した感じです！

ちなみにイギリスのビーガンキャンプはもっともっと粗食で、足りなかったら調達方式なので余る事は無いそうです。

「肉がなくてつらい！」って言ってた人もいたけど、キャンプですから肉好きの人を募って焼いたりするのも楽しいのでは…？

あの手間と食材で300円のヴィーガンプレート！また食べたいな～。

行商に協力してくれた札幌や小樽の飲食店や友人知人の皆さん本当にありがとうございました!!

LOVE&PEACE!!

ドリンクコレクティブ

みんなの憩いのスペース

キャンプ運営の収入源を担う

ドリンクコレクティブを立ち上げた一番の理由は、「これまでのキャンプでは、基本的にBAR（酒場）が在り、キャンプ運営の収入源になっていた」という話を事務局から聞かされたことである。

というのは表向きの言い方で、本当はこのコレクティブを担当した面子は単なるのんべえで、自分が飲みたいから率先して準備にあたったという表現が適切である。そしてやるからには自分だけでなく皆で憩える場所にしたいという理由をあとから付け足した。

準備に関しては、まず品揃えから。ビールは生ビールだとジョッキを洗わないとならないので瓶ビール。そのほか、焼酎、日本酒、ワインを用意した。ソフトドリンクは実行委の知り合いづてにおいしいトマトジュースを手配してもらい、炭酸飲料は北海道らしくガラナを用意した。

『居酒屋』というコンセプトで考えていたので、つまみには“ヴィーガンおでん”を提案したが、手間がかかるということであえなく却下。用意したのは実行委が自宅で漬けたピクルスと柿の種の2点。

DATA

住　　所：石狩郡当別町字中小屋
国際交流キャンプ内特設テント

電　　話：なし

営業時間：朝起きたら～夜寝るまで

定 休 日：08/07/03 ～ /06 以外全部

主なメニュー：瓶ビール（小）/ グラスワイン（赤・白）/ 焼酎（グラス）/ 日本酒（一合）...300 円～

コアップガラナ（瓶）/ トマトジュース（グラス）...200 円～

マウベシコーヒー（HOT）...100 円～

ピクルス / 柿の種 ...100 円～

カ ー ド：不可

席　　数：無数※体育館から運べるだけ

設備・サービス：小上がり有 / ショータイム（ぐんじーワンマンショー）有り

ワインのラベルに愕然となる

なるべく飲みものも地産地消ということで、ワインは「道民還元」というラベルの北海道のメーカーのものを仕入れる手配をした。ところが、当別キャンプに届いたそのワインのラベルには「サミットを応援します」というシンボルマークがついていた。“反G8”を掲げるこの領域にあってはいけないマークである。キャンプ参加者たちにあまり気づかれないうちにこっそりとこのマークを油性ペンで塗りつぶした。いいわけになるが、実行委が手配する際に店頭でこのワインを見た時には、このマークはついていなかった。

ワインのラベルについていたイケてないマーク

「居酒屋こいけ」のお店づくり

「居酒屋こいけ」の店内の作りこみは7月3日の朝からはじめた。グラウンドの一番校舎よりなところに設置したテントの下に、体育館から机、イス、棚を、調理室の隣の部屋からはグラス類やポットなどを沢山運び出した。

校舎の廊下には畳まであり、そこから3枚だけ運びだしてテントの中に“三畳間”を作った。ちゃぶ台風の机も体育館の山積の什器の中から見つけ出し、単なる“三畳間”から“小上がり”になり、ここは皆の憩いの場になった。

体育館に立ち飲み屋出現

体育館では映画祭、レイヴパーティー、各種ミーティングなど催しものが多々あり、ここでもビジネスチャンスを狙って、出張所を開設することを決めた。

体育館の外にある数多くの中からこれと思う冷蔵庫を運んできてきてコンセントに繋いでも動かない、壊れていると思って別のを持ってきてもダメ。途中からアジアからの参加者も手伝ってくれて3台目を運ぶ途中に居酒屋こいけ氏が指を切ってしまった。傷が深く血が多く出て止まらず、手伝ってくれたアジアの人も非常に心配してくれた。

あとからわかったが、体育館のコンセント差込口には通電されていなかった。

昼は食堂、夜は宴

たいてい食事を受けとると皆居酒屋のまわりに来た。世界中の人がここの学校机や椅子に座り、校庭のあちこちで和気あいあいと食事をした。この時間、「居酒屋こいけ」では、フェアトレードのマウベシコーヒーを淹れ、1杯100円のカンパで提供した。

夜はみんな瓶ビールの小瓶を300円のカンパで飲んでくれるが、居酒屋の店内で飲むわけではなく、みんな自由気ままにビールを持って散り散りに飲んでいた。酒場では共同代表の森山氏（愛称：グンジー）が、どかっと居座って飲んでいた。はるばるフランスからきた2人組と何人かで、初日の夜は26時までガヤガヤと飲んでいた。4日の夜も5日の夜もグンジーを囲んで延々宴が繰り広げられた。

投げ銭飲み屋の夢

居酒屋こいけ

いよいよキャンプが始まる時、田舎の野菜直売所のように無人酒場にしたいと提案した。ビールの栓なんて誰でも抜けるし、僕もぶらぶら遊びたい。飲み物の料金もビールの最低料金100円より～みたいにカンパの金額も、個々人に決めてもらう、出せる人はより多く、出せない人も遠慮なく飲める、というように。

実際、エスペラントの大会を例にすると、北の国と南の国では参加料が違う。お金の手持ちの量は住んでいる国で決まってしまう。まして、日本の中にも、アメリカの中にも、国内に南北問題が在る。

しかし、この提案は採用されなかった。

エコ コレクティブ

キャンプからでるゴミと環境負荷の削減

ゴミの発生を減らす努力

フードやドリンクコレクティブに考えてもらって、洗って再使用可能な容器入りのものをできるだけ使ってもらった。例として、びんビールなど。

受付近くにezorockから借りたプラスチック段ボール（雨で濡れても使える）の分別ボックスとゴミ袋を置いて、細かく分別してもらった。

日本語と英語表示の他、途中からキャンプ参加者に表示として絵を描いてもらったり、空き缶やプラスチックゴミその物を貼り付けた。分別ボックスナビ＆管理当番表を作ろうとしたが、これも自主性に任せることになった。

だいたい分別されていた。

当別キャンプ的循環スタイル

皿洗いコーナー

ご飯を食べ終わった人に自分で食器を洗ってもらうように、ドイツサミット時のキャンプの話を参考にテーブルの上に生ゴミ分別用のザルとバケツ、ゴムベラ、洗い用とすすぎ用のタライを並べて置いた。

多くの人が自分で食器を洗っていた。ヤンジーさんから借りた食器はフードのスタッフが片づけてくれていたと思う。

洗い水が汚れてきたら取り換える、管理当番表をつくろうとしたが、「キャンプ参加者が自主的にできる」という意見があり、自主性に任せた。

意見として、洗い水が汚れがちだった。タライが小さくて洗いにくかった。食器を乾かす場所が少なかった。食器洗いや洗い水取り換えの案内や表示があった方が良かった。などがあった。

謝辞

環境対策については、環境NGOezorock/はるきちオーガニックファーム、再生可能エネルギーについては㈲三素さんに相談、協力して頂いた。感謝申し上げたい。

分別内容	処理先
燃える、燃えない、燃やさない、プラスチック、ビン・カン・ペットボトル、危険物	当別町
生ゴミ	当別町内のはるきち君の畑でたい肥化
紙、リターナブルびん（一升びんなど）	札幌に持って帰り、資源回収業者さん
ビールびん	当別町のスーパーで回収

出されたゴミの行方

木質ペレットについて

エコ部　笠 小春

木質ペレットとは、木屑を固めて円筒状にした木質燃料のことで、原料には製材・建築時の残材、林地残材等が用いられます。

北海道は企業と連携し、厳寒地でも利用できる「北海道型ペレットストーブ」を開発し、購入補助をして普及を促進しています。年々ペレット生産量は増加傾向にあり、石油高騰に乗じて今後の延びも期待されます。

木質ペレットは石油・石炭や電気に代わる再生可能なエネルギー源です。また、エネルギーを自給・再生産できると共に、林業の活性化も担うと考えられます。でも皮肉なことに、つい数十年前まで薪ストーブが殆どだったのですね。環境に優しいと言ってむやみに使うのではなく、衣服や住居の工夫など、暮らし方そのものを見直して、賢い利用者になりたいものです。

最後に、ペレット関連商品を快く貸し出して下さった家次さんに心から感謝します。当日は行けませんでしたが、キャンプに関わってきた皆さんにも心から感謝します。

木質ペレットとソーラークッカー

木質ペレットバーベキューコンロはスタッフ配置に余裕がなくて調理にはあまり使えなかった（お湯は沸かせた）が、みんなで取り囲んで暖をとり、好評だった。後日興味を持って購入した人もいた。

ソーラークッカーは太陽光を集めて黒く塗ったやかんなどでお湯を作ったりゆで卵ができるとのことだったが、専属スタッフがいなかったので危なくて（下手に覗き込むと目を焼く可能性があるらしい）使えなかった。が、キャンプ前に数人が自分で操作し、興味を持った。

やりたかったこといろいろ

エコとは何か?ワークショップなどがあると良かった。

仮設バイオトイレの構想があった。有機物の行き先は生ゴミを受け入れてくれた農家のはるきち君に「行き先がなければ持ってきてもいい」と言われていた。トイレの設計図も書いてはいたが、衛生上の不安があり実現しなかった。

他に太陽光発電・ミニ太陽熱温水器のワークショップ、マキストーブの調理利用、自転車発電ワークショップ（札幌市環境プラザに借りる）、廃油バイオディーゼル発電、グリーン電力の利用などを考えていたが、余裕がなくてできなかった。

結婚式場で余るろうそくをもらってきて使うという案もあったが、実現しなかった。個人で持ってきたろうそくを「IZAKAYAこいけ」で使っていて、良い風情だった。

（文責：後木）

リーガルコレクティブ

リーガルとサミット警備

七尾寿子

文字通りの国際交流インフォセンターやキャンプとして安心して参加してもらうためには何が必要だろう?寝るところと、食べ物と、活動できるスペースと・・・。それも大切だ。けれど、かたいようだが、基本は参加する人たちの人権がちゃんと守られるかどうかということではないだろうか。

キャンプに着いた。受付で、もし、「登録が必要です。住所、氏名、年齢、職業、パスポート見せて、なんというグループに属しているの?何をしに来たの?」と聞かれ、パソコンに記録された上に、はい、写真もパチリ。通行許可証をつくります。・・・

その個人情報はどうなるだろう?

さらに、キャンプ場内に警備員や警察がまわっていて、尋問されたりしたら?監視されるのはいやだと、帰ってしまうだろう。キャンプの基本は人権を守るということ、そのためには、リーガルがだいじだというわけだ。

そのため、何人かの弁護士に、呼びかけ人に加わっていただいたので、なにかあったときには相談に乗っていただけるよう、お願いした。

前年度開催のドイツでは、市民団体と自治体の協働の開催運営であるはずのキャンプ/コンバージェンス・センター(キャンプ内に設けられた)と、そこから出発したG8反対行動に国防軍に監視させたということで、表現の自由の弾圧で違法だと提訴しているとのことである。

そこで、国内での大きなイベントの際のリーガル対策事例をレポートして弁護士に渡し、キャンプやインフォセンターの意義に対して過剰な警備がG8に対してのさまざまな表現を封じる人権侵害に及ぶ懸念があるという声明を弁護士会としても出せないか相談したが、それは実行委員会としても手がまわらず実現できなかった。

でも、実行委員会設立総会の時には、小坂弁護士にリーガルの意義をしっかり話していただいたり、場所が当別に決まって忙しい中で、ちゃんとリーガル講習会を実施したりしたのはよかった。講習会では、大賀弁護士から警察対策に必要な基礎知識をご教授いただいた。参加者の多くは、この講習会でデモやキャンプなどの政治表現が国家権力の弾圧対象であること、自分たちが警察との緊張関係の中にあることを実感した。だから、講習会はキャンプの政治的な意味を共有していくプロセスにもなったと思う。

そして、その弁護士の方々が7・5ピースウォークで不当逮捕者の弁護に力を尽くしてくださった。これは、これまでの札幌実行委の運動の力がもっとも発揮されたところでもあったという声もあった。

キャンプ付近に常駐していた公安の車

どう考えても悔しいことがある。キャンプ場決定で民間を含め30ヵ所ほどを見に行ったが、有力な候補だった豊平川河川敷は、所轄の国、北海道開発局から「万一、洪水があったら」と断られたが、G8サミット期間は機動隊の車両駐車場になっていると聞いて愕然とした。

わたしの手許に一枚の紙がある。

それには、「今回のサミット体制」と書かれている。各省庁や、道の機関の関連図だ。道議に頼んで、サミットの警備体制について出してもらったのだ。

【北海道危機管理に関する関係機関連絡会】には、

・道(危機対策局)
・第一管区海上保安本部
・陸上自衛隊北部方面総監部
・道警本部

と並んだ下に

・札幌市(危機管理対策室)
・札幌市消防局

が置かれている。

たとえば、自衛隊は期間の前後、24時間体制で複数の自衛官を道の危機管理対策室に常駐させていたようで、これはもう、過剰な「警備」どころか、今まで図上の計画だった、有事の際の治安・国防を試行する恰好の巨大な実験場だったのだ。

決裂のいきさつは重複するので省くが、この指揮下に組み込まれていたのだもの、自治体としての自主的な行政判断は無理で、市民が実行委員会をつくって提案、要請を重ねても、市の腰が重かったわけだ。管理しやすいキャンプ場の選定とキャンプ場内への警備員配置は必須だったのだから。

キャンプでは、勝手に人の写真を撮らない、が原則だった。

それから、非暴力アクションのワークショップや、座り込み、入口封鎖の練習もした。座り込み、入り口封鎖は内心、「ここまで必要か?」と思いながらやった人もいたようだ。

キャンプの向こうの道路にずっと停まっている車がいた。近づくと走り去るが、また戻ってくる。公安の見張りだ。あるとき、ジョギング・ブロックで左右からはさみ、追い返しもした。

管理された行政のキャンプを蹴り、一人ひとりの人権とキャンプを守る意識を持って、当別キャンプをやったことはすごいことだった。

救急コレクティブは、キャンプで医療行為をすることではなく、万が一の際に迅速に対応できるような体制を整えておくのが最大の目的である。なるべく〝万が一〟が起こらないことを願いながら。

まずは、協力してくれる医療機関を探した。ちょうど実行委の友人に医師がいて、何かあったときの対応をお願いしたところ快諾いただけたので、救急担当の島川さん、本多さんが打ち合わせに出向いた。これで怪我や病気が出たらいつでも受け入れていただけるとのことで大変心強くなった。打ち合わせに応じてくれた医師からは「キャンプに来るような人たちは自律しているからほとんど心配いらないだろう」というようなことも言われた。

医療機関との連絡体制は確保できたものの、キャンプ現場でも応急処置ぐらい出来ないと心細い。実行委の会議に看護師の方に来てもらい、救急箱の中身を一緒に検討してもらったり、救急病院のリストを作ったりしてもらった。さらに、看護師や養護教員の経験を持つ方、計９人に交代でキャンプに常駐してもらえるよう手配をした。その役割にあたってくれた方々は、こんな感想を言ってくれている。

「みんな、いろんな人がいてとってもおもしろい、行くのが楽しいとはりきってたよ」

「キャンプに来るような人たちだもの、ちゃんと自律してるから、けがや病気はほとんどないと思ってたのよ。だから、グンジーさんと飲んじゃって、ははは」（P26-27「かかわった人、支えてくれた人」でも紹介）

このような準備をしたが、実際には本当に大きなケガ人や病人など出さずに済んで、実行委一同、安心している。

救急箱の中身

- 消毒用エタノール（スプレーに入ったものは手指消毒用）
- 脱脂綿（エタノールを浸したもの）
- 虫さされジェル
- 絆創膏
- 正露丸
- 鎮痛剤
- 使い捨て抗菌ポリ手袋
- テーピングテープ
- 包帯
- ガーゼ
- 葛根湯
- はさみ
- マスク

「又、声をかけて下さい」

（Ｓ．Ｋ）

看護職を離れて七年になる。

さゆみさんからキャンプの保健室の手伝いを頼まれた時、かつて中学校の修学旅行に救護班でついて行ったことを思い出した。

はるか昔の話だが、あの時は、船酔い、腹痛、ちょっとした怪我や発熱などの他、病弱な生徒がいて、一晩看病したりした。今回も似たようなものだろうと想像した。

結果は風邪一名、化膿一歩手前の擦過傷の手当一名、あとは蚊よけ防止のスプレー噴霧など、拍子ぬけするほどの楽勝だった。

冷汗をかいたのは、スタッフを目の前にしての基礎講座（!?）。何と救急時の対処などを模造紙に書いて説明するのである。

ボーッとしながら、しどろもどろのレクチャー。気道確保などの実践には仲田さんがモデルになってくれた。

口惜しいことに現役時代の知識や勘がワーッと戻ってきたのは終わったあとだった。せめてもの慰めは、その夜包丁で手を切った人がいて、レクチャーのおかげで出血が少なく済んだと感謝されたこと。

次回はバッチリだから、又、声をかけて下さい。

ピースウォークの前日は寝袋持参で当直した。

ワークショップでは警察が来ることを想定してのスクラムの組み方なんぞをレクチャーしたりして、何やら緊迫感が漂い、私としてはちょっぴり保身の二文字がチラついたりした。

しかし、実際に行進が始まってからは、すぐ横の機動隊の盾の列に心の底から怒りがこみあげてきた。そして終わりに近づいた頃、サウンドデモ隊のメンバーが逮捕されたのを知った。あんなに一所懸命練習していたのに・・・。

サミットが終わって早三ヶ月。ようやくいろんなことがみえてきた。たまった資料を整理して自分なりの総括をするのはこれからである。（2008/10/16）

ワークショップ回想録

防災訓練@校舎全体

唯一あった、上から（当別町）のワークショップ。スタッフは避難、消火作業など楽しみつつ参加。

直接行動ワークショップ（非暴力トレーニング）@体育館

米国人女性サラの申し出により企画されたワークショップ。暴徒化している警察への非暴力での対応、心構えなどを教わる。

パペット作りワークショップ@体育館

パペット（人形）づくりのアーティストとして世界的に著名なデビット・ソルニットがトレーナー。7.5ピースウォークで使用するパペットを多数製作。

反Ｇ８ワールドカップ@グラウンド

みんなでボールを蹴って楽しめるように、みんなでルールを考えるサッカー。ひたすら楽しげに走り回る国際交流。

ブラック七夕

七夕が近かったので熊笹と葦とポールで竹もどきを作り、黒い短冊に願い事を書いた。さまざまな言葉をのせて、7.5ピースウォークへ。

医療講習会@フリースペース

元看護士から気道確保、心臓マッサージ、止血、擦過傷、日射病などの実践的な応急処置を教わる。止血がすぐ役に立った！

G8MN-TV　当別キャンプ～消防訓練＆記者会見
http://tv.g8medianetwork.org/?q=ja/node/253

G8MN-TV　国際交流キャンプ札幌 in 当別
http://tv.g8medianetwork.org/?q=ja/node/266

第１回洞爺湖映画祭前夜祭@体育館

上映担当＝イルコモンズ　［上映作品］▼「NO! G8 ACTION JAPAN 2008 予告篇」(NO! G8 ACTION JAPAN 2008 Trailer)2007 年 日本 編集＝イルコモンズ　▼「YOKOSO! JAPAN プロモーションビデオ」(YOKOSO! JAPAN PV)2008 年日本 編集＝イルコモンズ　▼「フェンス」(Der Zaun) 2007 年ドイツ 監督＝Armin Marewski Andreas Horn　▼「Ｇ８：これがサミットだ！」(G8: Das War der Gipfel!)2007 年ドイツ　▼「クラウンアーミーとおまわりさん」(Clown Army and Cop)2008 年日本 編集＝イルコモンズ　▼「ピンクのボールとブラックブロック」(Pink Ball & Black Bloc)2008 年 日本編集＝イルコモンズ　［レイトショー］▼「いちご白書」(Straebery Statement)1970 年米国監督＝スチュアート・ハグマン

「戦争と日本の原子力産業はつながっている」@ワークショップスペース

六ヶ所村に滞在していたフードスタッフと日本イラク医療支援ネットワーク事務局スタッフの飛び入り参加で実現。映像を使ったトークとディスカッション。

『Speak with them!』@ワークショップスペース

G8対抗フォーラムに来ていたデヴィッド・グレーバー、アンドレ・グルバチッチなどの知識人が参加。7.5ピースウォークの前日だったため、デモの表現方法についての議論が多かった。

『Another world is possible by marijuana 大麻から日本の人権問題を考える』@ワークショップスペース

大麻に対しての誤解と社会的偏見への見直しを求める、カンナビストによるワークショップとフリートーク。

レイヴパーティ@体育館

ドラムブロック / パペット / クラウンアーミーワークショップ@体育館

7.5ピースウォーク出発前に、イルコモンズ、デビット・ソルニットがオーガナイズ。体育館からグラウンドまでパレード練習。

サウンドデモのためのステンシル（イルコモンズ制作）

ワークショップのフライヤー　（イルコモンズ制作）

当別キャンプでのソルニットのパペット・ワークショップ

ALTERNATIVE VILLAGE WORKSHOP

「もしもなれるんだったら、ソルニットみたいなアクティヴィストになりたいと思った」（イルコモンズ）

オルタナティヴ・ヴィレッジ

「キャンプの意義は、宿泊の提供という物的なインフラにとどまるものではない。キャンプは、デモや対抗フォーラムとおなじように、それ自体がサミットに抗議する多種多様な表現方法のひとつである。キャンプでは、サミットの世界とはまったく別の空間が作りあげられる。オルター・グローバリゼーション運動のスローガンが「もう一つの世界は可能だ」だとしたら、キャンプはそれを数千、数万の人たちが生活をともにするなかで、「いま、この場で」作ってみようという実験にほかならない。キャンプをオルタナティブ・ヴィレッジとよんだのは、そのためである。（中略）サミットの特徴は二つあった。非民主性と新自由主義。それは、あらゆるものごとを秘密裏に「上から」決定してしまうことや、市場の価値で考えてしまうことを意味していた。キャンプでは、まったく逆のことがおこなわれる。キャンプで催される企画やルールは、すべて一から議論をかさね、みんなで考えて手探りでねりあげられる。」（栗原康）

MOVIE

映画「当別キャンプの記録」
ALTERNATIVE VILLAGE IN TOBETSU

2008年 カラー+B&W 17分 日本語字幕つき
撮影＝中村友紀+小田マサノリ
編集＝古賀志信
再編集＝イルコモンズ

YouTube と G8 MEDIA NETWORK TV
などで近日公開予定

ソルニットのワークショップ

「デビッド・ソルニットは、シアトルでのWTO抗議の指導者のひとりで、何年も前から名前は耳にしていた。彼が主催する「アートと革命」のワークショップに参加した若いアクティヴィストたちは、敬愛の念をこめて彼のことをよく話していた。若者たちは彼から抗議のあたらしいアイデアをたくさんもらった。閉鎖された政府ビルの外でプラカードをふりまわすだけの軍隊式デモ行進にしないためにはどうすればよいか。どうすれば巨大なパペットやパフォーマンスにあふれた「抵抗の祭り」にできるのか。つまり、人が集まったり、花を植えたりできるパブリック・スペースをいかに「とりもどし」、自分たちが破壊的だと考える会議を阻止するのか。彼のやり方は「だまって行動で示す」理論である。何に反対かを「叫ぶ」だけでは、人々の考えを変えることはできない。自分の理想を身をもって示すために仲間をつのり、イベントを自ら企画することではじめて他人の考えを変えることができるのだ。（中略）

ソルニットはウィンザーの刑務所に収監され、四日間勾留された。このティーチインの翌日、ソルニットはウィンザー大学で、パペットづくりのワークショップを開いた。その翌日には、米州機構への大きな抗議デモが予定されていた。彼はパペットを使った革命を説いている。人形を使えば、警察の動きもバカバカしい茶番のように見せることができるからだ。当局が彼を危険人物と見るのはただしいが、それは彼が他人の安全や財産を脅かすからではない。彼のメッセージはつねに非暴力的だが、それは非常に強力なのだ。（中略）ソルニットは米州機構の会議が終わるまで拘束されたが、彼のアイデアはウィンザー中にひろまった。プロがつくり商品として消費者が買うだけだったアートが街中にあふれていたのだ。コミュニケーションの理論家ニール・ポストマンは、かつてこう書いた。「教える」ことは、一種の「破壊活動」である、と。教えることで、若者たちが自分のDIY能力とクリエイティヴな力に気づいたら、これは本当に破壊的な力となる。しかし、それは犯罪行為ではないのだ。」
（ナオミ・クライン）

青森県、六ヶ所村核燃料再処理工場のすぐそばで、核燃に頼らない村作りを目指す「花とハーブの里」。そこに長期滞在していたキャンプフードスタッフと「市民サミット２００８」の分科会でイラクの現状や劣化ウラン弾の被害を報告するために来道した、日本イラク医療支援ネットワーク（ＪＩＭ－ＮＥＴ）のスタッフとで合同ワークショップを開催しました。

鈴木みちる

「ロッカショ～戦争と日本の原子力産業はつながっている～」報告

はじめに、青森県六ヶ所村にある核燃料再処理工場（以下、再処理工場）について説明しました。原子力発電所（以下、原発）でウランを燃料として発電した後に、使用済み核燃料と呼ばれるゴミがでます。このゴミから、プルトニウムという物質を取り出すのが再処理工場で、そのプルトニウムを使った発電施設が福井県の高速増殖炉「もんじゅ」です。

現在、再処理工場は試験稼動中で、本格稼働は２００８年11月（現在延期）、その後40年間稼動する予定です。この工場の建設費用は２兆２千億円で、40年間の運転費用は19兆円が見込まれています。しかし、この再処理工場にはいくつも問題があります。プルトニウムは長崎型原爆にも使用された物質で、１gで百万人分の致死量に相当し、半減期（放射能の量が半分になる期間）は２万４千年です。そして、この工場では年間８ｔものプルトニウム（長崎型原爆千個分に相当）を取り出し、放射性物質を大量に海と空に放出するため、癌や白血病の患者の増加が心配されます。さらに、この工場の真下には活断層があるとされ、耐震性にも不安が残ります。

また、高速増殖炉は１９９５年のナトリウム漏れ事故により現在停止中で、２０５０年以降に本格操業の予定です。つまり、再処理工場でプルトニウムを取り出しても２０５０年まで使用されませんから、２００８年に再処理工場を本格稼動させる必然性はありません。また、高速増殖炉の開発は非常に困難で既に米、英、独、仏が断念しており、日本だけが開発を進めています。

こうしてみると、再処理工場は本当に必要なのか、安全なのかをもう一度考え直す必要があると思います。

次に、日本の原子力産業がどのように戦争と、そして世界と結びついているのかを説明しました。日本は、米、豪などからウラン鉱石を輸入しています。ウラン鉱石も放射線を出しますから、米では、採掘に従事する多くのインディアンが被曝し、癌などの病に苦しんでいます。また、ウランの精錬過程で出る劣化ウランという副産物は、イラク戦争でも使用された劣化ウラン弾の原料です。今、イラクでは癌や白血病が急増しています。

ディスカッションでは、「再処理をしてプルトニウムを取り出した後に残るゴミ（高レベル核廃棄物）は、どうなるのか？」という質問が出ましたが、実は、その処分施設の建設地すら決まっていないのです。

また、豪国人の参加者からは、豪の核産業の現状について発言がありました。豪には原発はないが、ウラン鉱石を輸出しているため、多くの鉱山労働者が被曝し、癌で苦しんでいる。また、海外の高レベル核廃棄物の処分を引き受ける計画もあるとのことです。

六ヶ所村を知らない方もいましたが、このワークショップを通じて、日本の核産業の現状に関心を持ってもらえました。核産業や戦争をなくし平和な世界を実現するため、協力しようという想いを海外の人と共有できたとても意義のあるワークショップになりました。

YOU'LL NEVER WALK ALONE
～もう一つの世界のサッカー大会～

美野武三（RAGE&FOOTBALL collective）

今回Ｇ８が日本で行われることになり、国内は元より海外からも様々な人が抗議のために集まりキャンプをするという話を聞きました。こういう人達と交流する機会は滅多にないので、何か出来たらと思いました。

でも私は残念ながら英語が苦手です。ならば「言葉のいらない交流」をしようと思い、それならスポーツがいいのではと思ったのです。

私はスポーツが好きです（運動音痴で見る方専門なんですが）。日本ではオルタナティブな人達の周辺でスポーツをやる文化が余りないと感じたので、交流にもなりつつ新しいことが出来て面白いのではないかと…。

種目はサッカーにしました。サッカーは世界中で最も競技人口が多く、地球上で最も人類に愛されてるスポーツです。きっと海外からくる人の中にも好きな人がいるのではと思ったのです。

そしてやるからには普通のルールだけじゃなく、私のような運動音痴な人間でも楽しめるように「参加者全員でルールを決めるやり方」をやってみました。札幌入りする前に一度東京で開催しましたが、海外の人も含め沢山の人に来て貰って盛り上がりました。当別では他のワークショップもあったので人数は少なかったですが、それでも様々な人が入り乱れて楽しめたと思います。

ただ、海外の人は経験者だけじゃなく初心者の人も参加してくれましたが、日本の人は経験者の人が多くて少し残念でした。経験がないからこそ、気さくに参加してもらって新たな経験を楽しんで貰えたらと思ったのです。

ちょっと自分の世界から出てみれば「もう一つの世界」もさらに近付いてくると思いました。

また機会があったら、国籍を越えて繋がりたい人達と一つになって丸い球を追っかけたいと思っています。

国際交流インフォセンター

場所：札幌市中央区南８条西
２丁目市民活動スペースアウ・クル
304 Ａ号室
延べ訪問者数：約 300 人
置いたチラシ類：約 100 種類
オープン期間：７．１～10
おもな活動：【6.29 イルコモンズ・リトリート・キャンプサミット前夜篇】【7.2 Ｇ８対抗フォーラム札幌＆札幌キャンプ合同オープニング・パーティー】【7.4 ～９韓国風刺漫画展】【7.4 ～５バナー、バルーンペイントＷＳ / 着物ブロックＷＳ】～7.14 撤収

キャンプにはどうやっていくの？
～情報拠点としての役割

外国人であれ日本人であれサミット期間中に札幌にやってくる人たちのための情報拠点が要る！

キャンプ地提供についての札幌市交渉の最初から、情報拠点としてのインフォセンター（convergence center）設置のための施設提供も要望していた。

インフォセンターの役割として想定していたのは、４点。

インフォメーションスペース～まず何よりも、国際交流キャンプがどこに設置されていてどうやって行けばいいのか、やってきた人たちをキャンプにつなぐ場所やアクセスの告知。あちこちで開催されるさまざまなイベントやアクションについての情報提供。

休憩所～なれない街で、疲れたとき体調が悪くなったときなどに、相談したりちょっと一休みできる場所。

交流スペース～せっかくいろいろな国や地域からたくさんの人がやってくるのだから、市民レベルの交流をしたい、豊かな出会いを経験したい。

インターネットスペース～今やネット時代。情報を収集するにも提供するにも、知人友人とのメール連絡にも、インターネットは欠かせない。ここにいけばネットができるという場は必要。

昨年のドイツでは、廃校になった小学校を丸ごと提供してくれたと聞いていたので、旧曙小学校を借りられないかと要望したが、耐震性が不十分だということでダメ。

公共施設を借りるのでは、24時間対応ができない。大通公園にテントを張ってインフォセンターにしようかなどと話したりしていたときに、アウ・クル（旧豊水小学校）が一室空いているという情報が飛び込んできた。

昔の広めの教室1つ分の広さ、水道や流し台も室内にある。アクセスもいい。24時間利用可能。入居している市民団体の皆さんの理解と協力によって、ここにインフォセンターを開設することができた。

キャンプが札幌市内から遠かったこともあって、想定外だったが、泊めてくれとやってくる人もあり、インフォセンターにはいつも誰かしら泊っていた。スタッフの24時間常駐が入居条件の一つだったが、宿泊は利用目的に含まれていなかった。とはいえ、泊るところがない人を追い出すわけにもいかない。このインフォセンターは札幌市内の拠点として、本当にさまざまに活用された。

これもワークショップ？
～なんでもありの活動

イルコモンズ・リトリート・キャンプ サミット前夜篇

インフォセンター企画第一弾は、イルコモンズさんの映像ワークショップ（ＷＳ）。まず昨年のドイツ・ハイリゲンダム・サミットの際に開催地の周りに設置されたフェンスをめぐって、その中で暮らす人たちや周囲の様子を撮ったドキュメンタリー「フェンス」の上映、結構長い。続いて、ロストックで行われた10万人デモの映像を観る。これまで見たことのある部分もあるが、やはり10万人の迫力はすごい。マクドナルドでのクラウン・アーミーのアクション部分は初見。

一休みの後、映像と音によるＷＳはまだまだ続く・・・のだが、翌日の作業のために、参加者の大半はここで散会。

イルコモンズさんのＷＳは、夜が似合う。飲みながら、疲れたら床に寝そべったりしながら、一度は朝まで参加したい。

Ｇ８対抗フォーラム札幌＆札幌キャンプ合同オープニング・パーティー

Ｇ８対抗フォーラムと共催のオープニングパーティをアウ・クル体育館で開催した。

Ｇ８対抗フォーラムの海外ゲストをはじめ錚々たる活動家が続々やってくる。札幌の平野さんの司会で、ゲストのビフォさん、マリーナ・シトリンさん、平井玄さんなどからお話をいただいた後、Ｇ８市民ウィークス「軍隊／基地と女性」国際シンポジウムなどフロアからのアピールも続く。

と書くと硬そうだが、夕食とワンドリンク付きの手づくりパーティらしく、小グループになって飲みながら食べながらのアットホームな雰囲気のパーティだった。アウ・クル体育館は土足禁止なので、スリッパに履き替えてもらったのだが、床に座って飲むグループもあちこちにいた。床に座れるパーティもなかなかいい。

食事はもちろんヴィーガン料理なのだが、仕出しを引き受けてくれた夢屋の村上さんの料理のおいしかったこと。あげどうふいり野菜カレー、冷製パスタ、豆おこわ、豆腐ドレッシングの生野菜サラダ、デザートのつめたい白玉ぜんざい・・・、ヴィーガン・フードに対する認識が変わった。キャンプの居酒屋こいけチームがここでもドリンク・バーを担当し、赤字を出さないようしっかり働いてくれた。

韓国風刺漫画展

韓国の漫画家のコ・ギョンイル（高慶日）さんがもってきた風刺漫画を展示して多くの人に見てもらった。大学教員や政治家や軍人といった権力者を、一コマの漫画で風刺したもので、社会問題への関心がおもしろおかしく喚起される。また、その場にいた人たちとＧ８を皮肉る漫画を描くＷＳもおこなった。Ｇ８各国の言語で「なぜ？」とといかけるコピーに、覆面をして鉄球を持った巨人が両腕をふりあげる図柄。Ｇ８の破壊性と、そのようなＧ８がなぜ正当化されてしまうのか、という弱者の疑問を表現している。

高さんは、日本の風刺漫画について知りたいとのことで、スタッフが持っていた雑誌『サンデー毎日』の風刺漫画や、漫画という表現の可能性について話がはずんだ。韓国と日本の漫画表現について語り合うおもしろい経験だった。

これもワークショップ？ ～なんでもありの活動

バナー、バルーンペイントWS

7月4日の夜に、ピースウォーク主催メンバーがピースウォークの際に上げるバルーンを持ち込んできた。直径1メートル余りの大きなバルーン3つに、翌日のピースウォークに間に合うように、絵やメッセージを描きたいという。インフォセンターに行けば人がたくさんいる、インフォセンターでやれば作業もWSスタイルで楽しくやれる。

居合わせた人たちがたちまち参加して、水性絵の具で思い思いに絵を描いたり文字を書いた。白地のバルーンに緑色の「peace」の文字が鮮やかだった。

一緒に、韓国の風刺漫画家の高さんたちも車に貼るポスターやバナーづくりをしていた。

また、当別キャンプに行く前にパペティスタのデビッド・ソルニットさんが、パペットのパーツを持ってやって来た。

G8首脳のパペット頭部にはG8が引き起こしている諸問題を批判する「poverty」などの英単語が書かれていたが、その場にいた日本人が「貧困」などの日本語訳を書き込んだ。このパペットは当別キャンプで完成し、ピースウォークや洞爺湖現地デモで活躍した。

その他、小型のブッシュ大統領のマリオネットもあり、お互いに抱きつかせあったりして遊んだ。

インフォセンターでの日々 ～あわてて英語表示をペタペタ

インフォセンターでは、なんでも自由参加のWSになる。昨年のロストックのコンバージェンス・センターでも、バナーや旗などデモで使う表現物をつくるWSが盛んに行われたと聞くが、札幌インフォセンターでもピースウォーク参加のための準備作業をWS形式でやれたことは本当によかった。ガヤガヤ、わいわい、交流しながら、バルーンやバナーにメッセージを描く過程そのものがオルタナティブな世界の一部だったと思う。

当然だが、インフォセンターにはいろいろな言語の人たちがやって来る。インフォセンターが設置されたアウ・クルは、エレベーターの操作がややこしいし、あれこれ利用上のルールもある。

オープンしてから活動しながら環境を整えるという状況で、急遽、アウ・クルの入り口からインフォセンターまで何箇所かに、道順やエレベーターの操作、ゴミの出し方、トイレの電気の消灯などの英語表示をした。欧米人はもちろん、人種的にはアジア系（黄色人種）でも、国籍はオーストラリアという人もいて、やはり英語は流通範囲が広い。英語表示をしたことによって情報の流通が格段によくなった。

～言語と価値観

これもあたりまえだが、同じ言語を話す人どうしでも、価値観が同じだとは限らない。

価値観が異なる2人のドイツ人が一緒に居合わせたことがあった。2人の関係を知っていた日本人が、そのうちの1人に自宅に泊るように提案してくれて、何事もなくすんだ。言語による意思疎通はできる方がいいとしても、価値観が異なる場合は共通の言語を話す人どうしであってもともに過ごすことが難しい場合もあることに、あらためて気づかされた。

～美味ヴィーガン・パンケーキ

キャンプ同様インフォセンターに来る人たちの中にも、ヴィーガン（完全菜食主義者）が少なからずいるだろうということは予測できたが、コンビニで買えるものでヴィーガンが食べられるのは、いなり寿司と昆布のおむすびくらい。梅干しを食べられる欧米人は少ない。ヴィーガン・レストランの案内などもできればと話していたが、そこまで手が回らなかった。

そんな中で、早くから札幌入りしてインフォセンターにいたヴィーガンのジェイミーが、あれこれとみんなの食事の世話をしてくれた。誰かがインスタントラーメンに動物性の「stock」（ダシ）が使われていないかどうかを表記してくれたり、パンケーキをつくってくれたりした。豆乳を使った完全菜食のパンケーキは、思っていたほど素っ気ない味ではなく、おいしかった。

（報告・小林、細谷）

インフォセンター雑感

栗原　康

大変だったこと

僕がインフォセンターを訪れたのは7月7日。当別キャンプを引き揚げたあとのことだ。その日から数日間、インフォセンターに泊まり込んだ。それまでずっと常駐していた本多さゆみさんと比べれば何のこともないのかもしれないが、インフォセンターの業務もなかなかきつかった。７日の時点で、洞爺湖付近キャンプから帰ってきた外国人が何人もいた。昼間はいい。みんな読書をしていたり、外で遊んでいたりする。でも、夜、酔っぱらって帰ってきた人たちははんぱじゃない。寝かせるまでに一苦労だ。キャンプでは放っておけたが、「アウ・クル」という建物の一室を借りているインフォセンターではそうはいかない。正直、冷や汗もののときがたびたびあった。みんな寝静まってよかったと思った次の日の朝、トイレに起きて歩いていたら、建物の共同スペースにある卓球台の下に、パンクスのお兄ちゃんが寝ているのを発見したときもあった。こういうときは笑うしかない。

もちろん、大変だったのはこんな話ばかりではない。警察対策でも緊張の連続だった。「アウ・クル」の外には公安がずっと張っていたし、ご飯を食べに行こうと思えばそのままついてくる。７月５日のデモでは弾圧もあったし、それと絡めて何か警察がいやがらせをしにくるんじゃないかとも思っていた。だから、インフォセンターに泊まるといっても、ちゃんと寝たことはなかった。とくに、本多さんはすごかった。寝るとき、彼女はいつもゴザにくるまってドアの前に寝ていた。「どうしてそんなところに寝るの」と尋ねたら、彼女はこう答えた。「警察が来たら、ドアがゴツンと頭にあたって起きられるから」。まるで野武士だ。そんなことを１日から続けていたのかと思うと、頭が下がる。結果として、何の弾圧もなかったのだが、インフォセンターは、そんな緊張感のなかで運営されていた。

アウ・クルでの交流

とはいえ、基本的にインフォセンターはのんびりした交流の場であった。国内外からやってくる活動家はもちろんのことだが、「アウ・クル」内の市民団体の方々ともたくさんの交流があった。というより、みなさんの助けなしにインフォセンターは成り立たなかった。インターネットから電話、パソコン、ＦＡＸ、机、イスと、必要な備品の多くは「みてネット」さんや「シニアネット」さんにお借りした。また、たびたび「みてネット」さんの部屋にお邪魔して、コーヒーをごちそうになった。サミット期間中、僕は緊張しているときが多かったので、ホッとする時間をもらえてすごくありがたかった。

それから、僕が覚えているのは、フリースクール「漂流教室」からの来客だ。インフォセンターには海外の人がたくさんいたし、部屋にはいろんなバナーや絵が飾ってあったので、それをみに「漂流教室」の小中学生たちが毎日遊びにきた。ある朝、中学生くらいの女の子がやってきて、建物の外でタバコをすっている海外の人と英会話をしてみたいと言ってきた。「いいよ」と言って連れて行くと、外には前日飲んで騒いでいた悪そうな兄ちゃんがいた。だが、中学生を前にすると、目を輝かせてきちんと質問に答える。「なんでサミットに反対するんですか？」→「悪いからです」、「なんであなたは裸足なんですか？」→「わたしの国ではみんな裸足なんです」などなど。そんな交流があってから、その中学生は毎日インフォセンターに遊びにきた。最後にあったとき、その子は僕の前でこんな演説をした。「警察は悪だ。政府は環境サミットとか言っているくせに、全国からいっぱい警察車両をだして、ものすごい量の排気ガスをだしている。おかしい！」。インフォセンターは、まちがいなく一人の左翼少女を輩出した。

国際交流インフォセンター／国際交流キャンプ札幌実行委員会の

タイムライン

日付	会議・人の広がり	行政交渉・場所探し
3月後半	G8を問う連絡会キャンプワーキンググループ東京メンバーから本多らがインフォセンター／キャンプの話を受ける	藻岩スキー場など見て回る
4・11		非公式会合：札幌市サミット支援担当部
4・25		第1回市役所交渉：要請書を提出
4月末頃	共同代表3名決定／札幌市と交渉する要請団体作り	
5・1		「インフォセンター／キャンプ設置、土地建物提供の要請書」を市役所に提出、マスコミに公開
5・8	準備会会合：若者を組織化することが課題として挙げられる／呼びかけ人になってほしい人への依頼を進める	
5・9	わかものミーティング：弁護士や呼びかけ人と面談を進める	第3回市役所交渉：実行委員会から候補地を提案、市は調査
5・9		※市役所交渉延期
5・13		第4回市役所交渉：市が日程の期限設定を拒否
5・14	わかものミーティング改め、スタッフ会議	
5・18	事務局会議、キャンプ説明＋skype@さっぽろ自由学校「遊」	
5・19	実行委員会設立会合	
5・22		陳情書、札幌市議会に提出／札幌市議会会派回り
5・22		第5回市役所交渉：千五百人規模を固持。裏交渉をしないことにする
5・23	キャンプ説明会@札幌学院大学	
5・24		場所探し　現地視察
5・27		第6回市役所交渉：真駒内公園は**モモンガの巣があるので不可**
5・28	運営会議	
5・30	キャンプ説明会×2@しみせん「2007ドイツサミットから学ぶ、開催地域自治体と市民の協働」	札幌市議会：民主党議員説明会
5・30		北海道北海道洞爺湖サミット推進局と協議
5・30		第7回市役所交渉
5・31	キャンプ説明会×3@しみせん	場所探し　現地視察
6・1		場所探し　現地視察
6・2		協議　市役所みどりの推進課、農政課
6・3		市長へ手紙、電話、メール作戦　／　アウ・クル空室情報入手
6・4	運営会議	
6・5		要請書提出：回答期限付き（6／9）、記者会見
6・7	公開講演会「セイファー・スペース（〃より〃安全な場所）ってなぁに?」@かでる2・7	
6・9	運営会議：実施不可能な場合について相談始める	札幌市が要請書の要望に応えることが困難と回答する理由：『住民の理解が得られない』『財政』／「サミット開催期間中に市民生活への影響が生じないように、必要な対策」を市と実行委で協議継続することを確認　※マスコミ取材殺到
6・10		札幌市議会に「陳情取り下げ願い」提出、アウ・クル訪問、
6・10		場所探し：さとらんど視察／札幌市、さとらんどを候補地とする。 **ロ外禁止**
6・12		アウ・クルに企画書提出、運営会議に出席、入居契約成立
6・13	運営会議：当日入れる人を確認始める／エコ部結成	市による住民説明の進捗を聞く
6・15	フードコレクティブ会議：フード／ドリンク準備が進む	
6・16	運営会議	場所探し：さとらんど視察
6・17	エコ部会議、フード会議	市役所より緊急呼出し、候補地が西岡キャンプ場に変わる
6・18		西岡キャンプ場視察、市役所交渉
6・19	フード・メニュー会議@やぎや、フード会議、運営会議	
6・20	キャンプ説明会@北海学園大学	市役所交渉〃**自主管理**〃**の危機！**
6・20	メディカルサポート会議、エコ部会議	
6・22		アウ・クル二周年記念イベントを見学、挨拶
6・23	運営会議	西岡キャンプ場視察／市役所交渉：市、実委、それぞれ覚書案を出す
6・24		TVニュースで西岡候補地が流れる（札幌市がマスコミにリーク）
6・24		市役所交渉
6・25	運営会議：札幌市の覚書と妥協できないポイントを話し合う	市役所交渉
6・26	運営会議	市役所に電話、**交渉決裂**、記者会見
6・27	講演会「サミットって何ですか?」@紀伊国屋書店	当別町災害防災備蓄センターへキャンプとしての利用、正式申し入れ
6・28		ヤンジーと覚書を交わす／アプカシファイナルイベントにお邪魔する
6・29		当別に行く、はるきちオーガニックファームに行く
6・30	壮瞥町に米受け取りに行く／運営会議	当別町役場、石狩当別駅に説明に行く
7・1	キャンプ準備作業開始 山口受付付近で転倒、全治2カ月?の擦り傷	
7・2	朝、防災訓練／夜、部屋割り騒動勃発	
7・2	大賀弁護のリーガル講習会@弁護士事務所	
7・3	共同炊事（〜6日）、各ワークショップ（以下、WS）、マスコミ取材公開日、キャンプ運営会議	
7・4	居酒屋こいけ冷蔵庫運搬中右人差し指を切る、救急第1号 マイクロバス運行（石狩当別駅〜キャンプ）（〜6日）各WS、キャンプ運営会議、ガサ入れ対策訓練「Protect Camp!」 本多さゆみバースデー	
7・5	各WS、カンパ活動@大通公園6丁目広場、キャンプ運営会議	
7・6	午後、キャンプ撤収作業	
7・7	キャンプ撤収作業	
7・9	キャンプ撤収作業	
8・5	報告会実施打ち合わせ＆自律ビアガーデン	
8・31	G8キャンプ／インフォセンター報告会	

用語集

※正しい意味はご自分で調べましょう

another world is possible

「もうひとつの世界は可能だ！」オルタ・グローバリゼーション運動において頻繁に使われるスローガン。

Dissent!

ハイリゲンダムサミット対抗運動において、とくに直接行動とそのためのインフラ整備を組織化した人々のネットワーク。コンバージェンスセンターやキャンプの運営も担っていた。このネットワークによるインフォツアーが、2007年9月〜10月、日本を重点的に東アジアでおこなわれた。

ezorock

札幌に拠点をおく環境NGO団体。ライジングサンロックフェスティバルなど、イベントのごみ削減を通じた意識啓発活動に取り組んでいる。当別のキャンプでは、ゴミの分別用の道具やゴミ袋を無償で提供していただいた。

アクティビスト

活動家。政治や世の中の問題点を意識し、直接的に取り組む人。

ヴィーガン

完全菜食主義　詳しくは↓p.36

オルタナティブ

原義的には「新しい、更新された、次世代の」だが、キャンプでは「もうひとつの世界は可能だ」というスローガンの「もうひとつ」を表現する言葉として使われている。

カンナビスト

大麻が科学的見地からタバコや酒に比べて有害ではないという見地から、大麻の無罪化を求めている非営利の市民団体。カンナビストHPより引用

救援

7／5警察に襲撃された3人を、早く取り戻すために作動した。運動の委縮を拒否するために必要な体制。

協働

我々が札幌と対等の関係で協力し、キャンプを実施しようという意味で使用した言葉。実現に至らなかった。

クィア

原義的には「不思議な、風変りな、奇妙な」だが、セクシャルマイノリティやトランスジェンダー（↓後述）などの人々すべてを包括する言葉としても使われている。

クラウンアーミー

ピエロ（クラウン）の格好をして、デモを祝祭的に彩る役割を担う。また、デモ隊と警官の間に立ち、緊張を和らげる行動をする。

グローバリゼーション

マクドナルドVS.アナーキスト

現地キャンプ

サミットに関連するキャンプは、当別以外に豊浦、壮瞥、伊達の3か所で開かれた。

コレクティブ

一般的には「班」。欧米で活動しているワーカーズコレクティブから取られたと思われる。ワーカーズコレクティブとはスペインのモンドラゴン協同組合が有名だが、働く者すべてが出資をし、各々が対等に事業主として働く共同体。

さとらんど

札幌市東区にある農業体験交流施設。市との交渉の中で最初に候補地として提示された。市のことばを信じて、実行委は何度も下見したが、実施には至らなかった残念な場所。

スクウォット

放置された建物を勝手に占有・占拠し、住み、生活し、管理する事。人には住居で暮らす権利がある！！

すべりひゆ

野草。はるきち農場で採れ、キャンプで食した。美味しい草。

セイファースペース

詳しくは、p35

セクシャルマイノリティー

ヘテロセクシャル（異性愛者）ではない人々。レズビアン・ゲイ（同性愛者）、バイセクシャル（両性愛者）などの人々。性的志向は宗教なども絡み非常にセンシティブな問題だが、多様な在り方を考える際に避けては通れない問題だと思う。キャンプの際もお互いを、当たり前に尊重し合えたと思う。

（一部、ウィキペディアより引用）

当別町

もともとヤンジーの災害防災備蓄センターが在ることで、日本中に名を轟かせていたが、今回のキャンプで、世界的になった。

道民会議

今回のキャンプとは対極的な立場の個人や企業が参加する団体のひとつ。

トランスジェンダー

性同一性障害などのさまざまな理由から、性を変更したり、さまざまな処置を施すこと。

西岡青少年キャンプ場

私達と交渉決裂した後、札幌市がキャンプを開催した所。数人の方が利用した様だが、その方々には申し訳ないことをしました。申し訳ない。

パペット

操り人形の意。デモにおいて沿道の人々にアピールする際、大きな効果を発揮する。キャンプにはデビット・ソルニットというパペット界の道場六三郎も来ていた。

はるきち君

札幌近郊の若き有機農業者。キャンプに巨大な鍋、蒸し器を貸してくれた。キャンプの食材（野菜や豆類の一部、野草も）の提供者。

ブロック

集団の意。○○ブロックという風に、その集団の目的などを示す言葉が先頭につく。7／5のピースウォーク前後にはブラックブロック（全身黒尽くめの集団）を異常に警戒する様子がTVニュースに登場し、政治や抗議活動などに無関心な市民にまで一般的な単語として知られることになった。その他、ドラムブロックはドラムを叩きまくる集団、ランニングブロックは走りまくる集団、などキャンプ及びピースウォークに存在していた。

ペレットストーブ（ペレット）

廃材や林業の残材などを細かく砕いて固めた燃料（木質ペレット）を使うストーブ。化石燃料の代替として地域の資源を使えるため、近年注目されている。

ワークショップ

一般的には体験型の講座を意味するが、当別キャンプで行われたものについての詳しいことは↓P.47